

ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(7)

守川 知子* 監訳

ペルシア語百科全書研究会** 訳注

(p.331) 第6部 彫像や図像の驚異について

知れ。世界中で数多くの像が訓戒のために造られた。それらからは教訓が得られよう。たとえば、スイニンマルはシャブディーズの像を石から造り、ホスロウはそれを見て嘆き悲しんだ¹⁾。人々は「どうして泣いておられるのですか?」と言った。[ホスロウは]言った。「この像は私にこう知らせている。『おまえもおまえの馬も動かなくなるのだ。わたし(像)が静止しているように、おまえたちもまた、わたし同様、動きのない状態になるのだ』と。」

知れ。「像を造ること」は禁忌(harām)である。だがそれは心に影響を与える。

[逸話]

イスカンドルはアリストテレスと会うことを熱望した。しかし、彼らは遠く離れていた。イスカンドルは彼(アリストテレス)の姿を描くように命じた。[送られてきた]アリストテレスの顔は不機嫌そうに見えた。イスカンドルは彼に、「この不機嫌さをどうにかせよ」と言付けを送った。[アリストテレスが]伝えたことには、「私の不機嫌は失望からきている。なんとすれば、世界は災厄に満ちている。私は一滴の水から創造されたが、これほどの不幸の中にある。あらゆるものの終わりは死と消滅なのだ。」

それから、命じてイスカンドルの肖像を作らせた。その目には斜視(hawal)があった。アリストテレスは「なぜ斜視がなくなるようにご自分の目を治療しないのか?」と言付けを送った。イスカンドルは答えた。「私の斜視は、書物を見たり訓戒を読んだりすることが多いためだ。もしあなたがおっしゃるのであれば、処置しよう。」

アリストテレスは答えた。「処置はされるな。斜視で学識ある者は、無知で見た目の良い者よりもすばらしいのだから。」

[逸話]

アジャムの王が絵師と鳥占い師(zājir)をヒジャーズへ遣わし、預言者——彼に平安あれ——の肖像を作り、鳥占いを行って報告するように命じた。彼らが帰還したとき、アジャムの王は鳥占い師に「占いは何と出たか」と尋ねた。

* 北海道大学大学院文学研究科准教授

** 本研究会については、『イスラーム世界研究』第2巻2号(198-204頁)の監訳者による「解題」を参照のこと。

1) これは、イラン西部のケルマーンシャーの町にあるサーサーン朝期のレリーフ、「ターケ・ポスターン」を指している。このレリーフについては本文中で後に詳述されるが、作ったのはスイニンマルではなく、ファルハードだという説もある。なお、シャブディーズはサーサーン朝君主ホスロウ・バルヴィーズの愛馬の名であり、スイニンマルはハワルナク城を建てたことで知られる有名な建築家である。本訳注(4)および(5)も参照のこと。『イスラーム世界研究』第4巻1-2号、2011年、503頁、第5巻1-2号、2012年、408-409頁。また、ターケ・ポスターン遺跡については、深井晋司・堀内清治編著『ターケ・イ・ポスターン』(東京大学東洋文化研究所、1969年)を参照されたい。

鳥占い師は「何もわかりませんでした」と言った。

絵師は預言者の肖像を見せた。アジャムの王はその絵をクッションの上に (p.332) 置き、それをまじまじと見た。鳥占い師は言った。「王よ、そのような行為はムハンマドを栄えさせます。」

[王は] 言った。「おまえは占いでは何もわからなかったのに、なぜそのように言うのか？」

[鳥占い師は] 答えた。「あの場では何もわかりませんでした。しかし、王はここでその絵をクッションの上に置かれました。その行為が [ムハンマドを] 栄えさせるのです。」

彼が言ったとおりになった。まことにアッラーは最もよく知りたまう。

【第1章】 預言者たち——彼らに平安あれ——の像

シャアビー²⁾ は次のように語り伝えている。

アブー・バクル——アッラーが彼に満足されますように——が私たちの一団を使者としてルームの王に遣わした。彼の宮殿の門に到着し、私たちは「神は偉大なり」と唱えた。[ルームの王は] 人を遣わして、私たちをある宮殿へ連れて行き、私たちをもてなした。2ヶ月後、私たちは入城の許可を得た。王は人払いをして、言った。「おまえたちが言ったあの言葉は何であったのか？」

私たちは答えた。「アッラーは偉大なり、です。」

[王は] 言った。「なぜにそうするのか？」

私たちは言った。「創造主を賛美するためです。」

[王は] 言った。「おまえたちがそのように言うと、どこでもおまえたちの家は壊れるのか？」

私たちは「どういうことですか？」と聞いた。

[王は] 言った。「おまえたちがそれを口にしたその日に、わがイーワーンは内側から壊れたのだ。」

私たちは言った。「私たちの国では壊れませんが、[信仰の] 敵対者たちの家は壊れます。」

[王は] 言った。「おまえたちの使徒はアフマド (ムハンマド) か？」

私たちは「はい」と答えた。

[王は] 言った。「もし彼の絵姿を見せるなら、おまえたちは見分けられるか？」

私たちは「はい」と答えた。すると、[王は] たくさんの小さな扉のついた箱を1つ取り出した。扉を開き、絹絵を取り出した。[王は] 言った。「この絵は誰か？」

私たちは「アダム³⁾の絵です」と答えた。それから [王は] ヌーフの絹絵を出した。そうして絹絵を1つ1つ出しては私たちに見せ、ついに預言者——彼に平安あれ——の絵姿のある絹絵を差し出した。私たちは「神は偉大なり」と唱え、言った。「これこそは私たちの預言者のお姿です。」

そこで [王は] 言った。「これはダーニヤール (ダニエル) ——彼に平安あれ——の姿が描かれたものだ [と私は思っていた]。私は彼に帰依していた。だが [いずれにせよ、ムハンマドの姿だということは] わが軍には隠しておこう。」

[王は] 私たちを数々の賜衣とともに送り返した。

<逸話>

ルームの町に聖堂がある。その中には石でできた柱があり、柱頭にはラクダに跨がり武器を手に

2) 初期の著名なハディース学者。本訳注(5)、注319、425頁を参照。

した騎士の像がある。ワリード・ブン・ムスリム(Walīd b. Muslim)³⁾は言う。「私は『この像は誰なのか?』と尋ねた。(p.333) 人々は、『ルームの町を建てた人物だ』と答えた。私は言った。『怖れることはない。あなたがたの町は誰も征服しない。ただし、乗り物がラクダである人物は別だが。』」

アンダルスにも同様の驚くべき像がある。ターリク・ブン・ズィヤードがアンダルスを征服したとき、24の錠がかけられた館を見た。全財宝を略奪したのち、彼はこの館を開けようとした。修道士たちが「この館には金目のものは何もありません」と宣誓したので、[ターリクは手をつけず]放っておいた。アンダルスの諸王の最後の者であったルズリーク⁴⁾の治世になったとき、彼は「私がこの館を開けよう」と言った。助祭たち(šammāsīya)は言った。「この館にどれだけの金銭があるか見積もられよ。我々がその金額をあなたに与えよう。[だが決して]この館は開けてはならない。」

[ルズリークは]「私は開けるぞ」と言った。彼が開けてみると、館は空で、ラクダに跨がり槍を構えたアラブ人⁵⁾の像があった。見ると、館の正面には次のように書かれていた。「この館が開かれるとき、アラブの軍がアンダルスを征服するであろう」と。ルズリークは怒り、後悔して、館の扉を閉ざした。助祭たちは嘆き悲しみながら言った。「ここに来た王はみな、錠を増やし続けてきた。しかし、あなたはすべてを外してしまった。」

しばらく後に、アラブ人がこの地方を征服した。ルズリークは殺され、アンダルスはイスラームの民の手に渡った。

<もろもろの像>

コンスタンティノーブルにとある広場がある。その周囲には堅固な壁があり、その中には3体の銅像がある。1体は指で耳をふさいでいるが、それは礼拝の呼びかけをしているビラル(Bilāl)⁶⁾である。もう1体の大きな像は、ルームの言葉で次のように書かれている。「これはこの世で最後の預言者の像である。この像から手足の1本が欠けると、世界の3分の1が減ぶ。さらにもう1本が欠けると、[合わせて]世界の3分の2が壊滅する。」

もう1体の像はその向かい側にあり、それは騎乗し、手に持った槍で蛇を打ちのめしている。この騎手は、アリー・ブン・アビー・ターリブであると言われている。コンスタンティノーブルの人々はその建物を守り、それらに害が及ばないように戸口を隠してしまった。

サーリム・ブン・アブドゥッラー(Sālim b. ‘Abd Allāh)⁷⁾は次のように言う。ある暴虐な王がここに来て、鉄器でこの像を叩いた。その日、(p.334)フェルガーナがひっくり返った。3000もの人々が土の下から運び出されるほどであった。その後、誰もその像に近づけないように、その建物には巨大な壁と覆いが施された。コンスタンティノーブルの人々は言う。「この世の繁栄は我々の保護のもとにある。なぜならもし我々が、像が破壊されるにまかせれば、世界は滅んでしまうのだから。」

3) 主題別分類(ムサンナフ)型のハディース集で知られたダマスクスの伝承学者(810年没)[*EF²: Mušannaf*]。

4) 本訳注(5)、382頁に既出。西ゴート王国の王ロドリク(ロドリゴ)のこと。在位710-711年。グアダレーテの戦いで、反対勢力が内通して呼び寄せたムスリム軍に破れた。その際に戦死したとも、行方不明になったとも伝えられる[関哲行、立石博高、中塚次郎編『スペイン史I 古代～近世』山川出版社、2008年、24頁]。

5) Lā写本では「アラブ人」ではなく「外国人(ġarīb)」となっており、こちらでも意味は通じる。

6) 預言者ムハンマドの教友。エチオピア人奴隷であり、メッカにおける最初期の改宗者である。メディナでイスラーム史上初めてのムアッズィン(礼拝呼びかけ人)に任じられた。第2代正統カリフのウマルの時代にシリアに移住し、同地で没した。没年と埋葬地には諸説ある[*EF²: Bilāl b. Rabāh*]。

7) 第2代カリフ、ウマルの孫にあたる人物のことか(725年没)。信頼性の高い多くのハディースを伝えたことで知られているが、コンスタンティノーブルとの関わりは明らかではない[Ibn Ḥallikān, *Wafayāt al-a’yān*, vol. 2, pp. 349-350; al-Ṣafādī, *Kitāb al-wāfi*, vol. 15, pp. 83-85]。

<預言者 [ムハンマド] ——彼に平安あれ——の像>

ズィムヌーン・ブン・タウフィール・アル＝アスィーニー (Ḍimnūn b. Tawfīl al-ʿĪṢNY) にはひとりの息子がいた。ソグドの民が彼(息子)を捕虜にして連れて行き、別の部族に売り払った。彼はオニキスの鉱山に送られ、しばらくの間そこにいた。[あるとき] 飢饉が起り、長い間続いた。[彼は次のように伝えている。]

ある日、この地方で歓声がわき、人々が喜び合った。私は尋ねた。「あなたがたに何が起こったのですか？」

彼らは言った。「この地方にはオニキスの鉱山があります。[そこから] 像が見つかるならば、それは豊作の兆候で、この先100年間、飢饉は起りません。」

私は言った。「その像は人々に供覧されるのですか？」

[彼らは]「はい」と答えた。その後、[その像は] 王の宮殿に運ばれ、立派な宮殿 [の中の] 黄金の玉座の上に置かれた。麝香や竜涎香がまかれ、絹のベールが吊るされ、その場は喜びにわいた。王が中に入ると、ベールが取り外された。私が見たところ、何と我らの預言者——彼に平安あれ——の像であった。私は泣き、彼らは喜んだ。彼らは私に尋ねた。「おおアラブ人よ、[ここは] 喜びの場だ。なのに、おまえはなぜ泣いているのか？」

私は言った。「私がお方を知っているからです。これは、ムハンマド・ブン・アブドゥッラー・ブン・アブドゥルムッターリブのお姿なのです。」

私は王の前に連れて行かれた。通訳が事の次第を王に話した。王は言った。「彼にながしかのものを与えて、この地方から追放せよ。この地方の人々が [この話を] 知って、改宗してしまう前に。」彼は船に乗せられ、追放された。

知れ。預言者 [ムハンマド] ——彼に平安あれ——の像はたくさん作られている。イーサー——彼に平安あれ——の像もまた、特にルームの地方で [たくさん] 作られている。

(p.335) <逸話>

マグリブの境域に、アリーという名の男がいた。創造主は彼に [特殊な] 声を授けていた。たとえ勇者でも、彼の声を聞くと泣いてしまい、王たちは [彼の声を] 聞くために彼を連れて行ったものだった。

男はマグリブの王の前で、「仮令(たとえ)一部のクルアーンがあつて、それにより山々が移動され、大地が裂かれ、または死者に語らせることが出来ても」[Q13: 31] という章句を朗誦した。王は彼の前で自らの軍とともに跪拝した。夜ごと、王の妻女たちは [彼の声を] 聞くために彼のもとにやってきた。

王のもとには、悪意ある者がひとりいた。彼はこの王に対して手紙を書いた。「あなたはなぜよそ者たちを町中で放っておくのですか。あなたの妻女たちは、夜ごと彼のもとに通っているというのに。」

王は彼を投獄し、毎夜、牢の入り口にやってきては、『クルアーン』を聞いていた。

アリーは言った。「私の声は私の不幸の原因となった。ユースフの美が彼の不幸となったように。」

このアリーは自分の父親に手紙を書いて、自分の状況を明かした。父親はこの地方を目指した。人々は彼に言った。「あなたの息子はマグリブの海の向こうにいます。渦潮が行く手にあり、それ

を越えない限り、あちらには行けません。』

父親は鉄の箱を作り、その中に入り、自らを渦潮に投じた。箱は向こう側に流れ着いた。船乗りが拾い、王の御前に持っていった。彼らは宝箱だろうと思ったのである。ふたを開けると、意識を失った1人の男が現れた。男は意識を取り戻すと、自らの事情について説明した。彼は息子の前に連れて行かれた。

父子2人はとある聖堂に連れて行かれた。そこには2体の像があった。1体はアードム、もう1体はムハンマド——彼ら2人に祝福と平安あれ——の像であった。人々は旗を持ってきて、それらの像の上に据えた。アリーは尋ねた。「これらの旗は何ですか？」

答えていわく、「いつの時代であれ、目新しい出来事があると、その日付が旗に書かれ、ここに据え付けられるのです。」

「アリーは」尋ねた。「どんな驚くべきことがあったのですか？」

人々は言った。「あの渦潮からは、あなたを除いては誰も生きて出てきたことはありません。これは滅多にないことです。ですから私たちは旗を増やしました。別の時代には、(p.336)この海から鳥たちが現れ、岩山の方へ向かうのを見ました。鳥の嘴からは火が噴いており、煙が立ちこめて私たちの息が詰まるほどでした。私たちはこの像に執り成しを願いました。すると煙は消え、日没時にそれらの鳥は帰って行き、海の中へと沈んでいきました。[それを見て] 私たちは旗を1本この像の上に立てたのです。」

アリーは言った。「それはまさに、カアバを荒らしていたエチオピア人(ハバシャ)の頭上に石の雨が降った日です⁸⁾。」

人々は言った。「また別の日には、地震が起こり、私たちのアーチやイーワーンがいくつも壊れました。7日間続き、すべての拝火殿が壊れてしまいました。私たちがこれらの像に執り成しを願ったところ、鎮まりました。私たちはもう1本の旗をこれらの上に立てました。また別の日には、天空の月が2つに割れ、世界中で大騒ぎになりました⁹⁾。私たちは、この災厄が過ぎ去るよう、これらの像に執り成しを願い、月は正常に戻りました。私たちはもう1本の旗を立てました。」

アリーは言った。「あなたがたの見たそれらのことはすべて、我らが預言者の奇蹟なのですよ。」

【第2章】 珍しい像について

さて、まじないによって作られたいくつかの像について、1章を設けて記していこう。そうすれば、「創造主がしもべたちに天啓を与え、[その天啓によって] しもべがこのような驚くべきものをつくりだしている」とそなたは知ることができよう。そして、「それは神のお力によるものであり、被造物の力によるものではない」と知るであろう。まさにそれは、記述というものが筆によってではなく、著述家の手によってなされるのと同様である。

<トゥルクスターンにある像>

トゥルクスターンの境域にある山の上に1体の像がある。直立し、手は口を塞いでいる。飢饉になると人々はそこへ行き、子供たちが水乞いをする。すると、その像は口から手を離す。大量の水

8) 本訳注(5)、367頁参照。

9) 月が2つに割れる話については、本訳注(2)、430-431頁参照。

が像の口から流れ出し、原野は水で満ちる。像が口から手を離すよう執り成しができた者に王国が与えられ、再び飢饉が起きるまで、その者の子孫に受け継がれる。[飢饉の度に] 像は誰かに応える。この像は泉の上に作られた護符である。噴水が設けられており、それは、その人物のみが知っている方法で¹⁰⁾ 造られている。

(p.337) <東にある像>

ヒンドゥスターン方面の東の境域に1体の像がある。横たわっており、建物の中に納められている。豊作になる年はいつも像の口から口笛が流れ、町の全員に知らされる。それが豊作の証しである。

バーミヤーンの境域には「アスタル伽藍 (ASTR Bihār)」¹¹⁾ と呼ばれる場所がある。2体の像があり、双方とも250アラシュの高さである。いくつもの冠を頭の上に載せている。一方は「白像 (hīng-but)」、もう一方は「赤像 (surh-but)」と呼ばれている¹²⁾。像の鼻に鳩が巢を作っている。太陽が昇ると2体の像はともに笑う。これについては、私は数多の書物で目にしたが、像が微笑む理由はわからなかった。まことにアッラーは最もよく知りたもう。だが、この微笑みは驚くべきことではない。というのも、太陽が照らすあらゆるものに陽気さや快活さが現れ、そのようなものは太陽に心を傾けるからである。夜は異なる風情をしているチューリップが、太陽が昇るとみな太陽の方を向いて太陽を追いかけて行き、太陽が沈むと何かしら別の様相になってしまうようなものである。

<ヒンドの像>

ヒンドゥスターンに1体の像がある。両手を空中にあげ、口からは水が噴き出している。矢の1射程分上空に噴き出し、そしてその偶像の真上に落ち、鉛でできた池に集まる。その町の人々はそれを見ることを楽しみにしている。

[アンダルス像]

ムドリク・ブン・アル＝マフディー (Mudrik b. al-Mahdī) は言う。

「私がアンダルスの方からトレドに向かっていると、銅像が目に入った。山の上であり、片足で立っていた。左手をあげ、両目の間には『これより先に道はなし』と書かれていた。ヒムヤルの王ズー・シャルフ¹³⁾がこの像を作ったのであった。世の人々はこの像がいかにして作られたのか思

10) 底本に従う。サーデギー校訂本では、「誰も知らない技術によって」となっている。

11) 玄奘が伝える梵衍那国の伽藍 (サンスクリット語では「vihāra」) に由来するものと思われるが、この伽藍の名前は未だ明らかにはなっていない [玄奘三蔵『大唐西域記』水谷真成訳、平凡社、45頁]。またASTRの読み・意味ともに不明である。

12) バーミヤーンの仏像を指すのだろう。「白像」「赤像」の名は、『世界の諸境域』にも見られる。また、本書第1部第3章でも、太陽に関する不思議譚の1つとしてこれらの像の話が載せられている [Hudūd al-‘ālam, p. 101; 本訳注(2)『イスラーム世界研究』第3巻1号、2009年、425-426頁]。

13) ヒムヤルは、イスラーム以前のイエメンの王国の名称であり、さまざまな伝承の題材となっている。ズー・シャルフは、本書では「ビルキースの城砦」中に言及があり、ジンと結婚した宰相であり、かつ「シバの女王」として知られる美女ビルキースの父親である。一方、本書ではヒムヤルの王として、「リー・シャルフ」という人物名もまた挙がる [本訳注(5)、396頁、446頁]。なお、既に指摘したとおり、『冠の書』ではシャルフ (al-Šarh) という王がグムダーン城を建設したと紹介されているが、別の箇所では同様に王としてズー・シャルフの名が現れる [al-Hamdānī, Kitāb al-iklīl, vol. 8, pp. 52, 60]。よって本書では、宰相でありビルキースの父でもあったズー・シャルフと、ヒムヤル王でありグムダーン建設者でもあったズー・シャルフ (原文ではリー・シャルフ) が登場することになるが、ここでは後者を指していると考えられる。

いもつかない。そこで一部の者たちは (p.338) 『地面から生えてきたのだ』と言ひ、あるいは『天から降ってきた』と言っている。というも鋤で打ち出すことも、鑄型に流し込むこともできないからである。何しろアダムの子孫にはそのようなものを作り出す力も才能もなく、よもや、それを作った者が創造主の天啓かあるいは預言者たることの奇跡にでもよらない限りは [不可能なのである]。』

<イスカンダリーヤにある像>

アブドゥッラフマーン・ブン・ザイド・ブン・アスラム (‘Abd al-Rahmān b. Zayd b. Aslam) は言う。
「イスカンダリーヤに1体の銅像があった。それは『シャラーヒール (Šarāhīr)』と呼ばれていた。1匹のカメの上に置かれ、コンスタンティノーブルを指差していた。誰がそれを作ったのかは誰も知らない。ある日人々が目覚めると、眼前に出現していたのである。やがてアブドゥルマリク・ブン・マルワーンの時代にその像は鎔かされ、硬貨にされてしまった。数日後アブドゥルマリクは死んだ。」

[第3章 不信心者たちの像について]

知れ。不信心者たちは数々の像を作り、ときに崇拜してきた。その理由は次のとおりである。イドリース——彼に平安あれ——が天に昇ったとき、彼には1人の弟子がいた。別離の悲哀ゆえに、弟子はイドリースの姿を純金で作し、台座に据えた。毎日その像に向かって跪拜し、そして現世から旅立った。彼の弟子たちはその慣習に則り、それが定着した。

世界中で、偉大な事業というはごく小さなことから生じるものである。

<逸話>

次のように言われている。ハールーン・アル＝ラシードの時代に1人の男が現れ、500マンの沈香を手し、カアバで焚きたいと許可を求めた。ハールーンは喜び、彼を称えた。イマーム・ムハンマド・ブン・イドリース・アル＝シャーフィイー——彼にアッラーの満足があらんことを——がその場にいた。彼は言った。「喜ばしいことではございません。」

[ハールーンは] 言った。「どうしてか?」

[シャーフィイーは] 言った。「今年は500マンの沈香を燃やすとします。翌年は400マン、その翌年は300マン、そしてやがて1マンでもやってみましょう。長い時を経れば、カアバは拝火殿であると言われましょう。」

ハールーンはこの言葉に驚き、その男を捕らえて調査した。男は火を崇拜するマジであった。
[ハールーンは] 男を殺した。

(p.339) <むくろ (al-jasad) の像>

「かれの王座の上に軀骸 (al-jasad) を置いた」 [Q38: 34] という至高なるお方のお言葉 [について]、一部の者たちは言う。それは、次のような [謂れの] 像である。スライマーンはルームの王を殺し、その娘を求めた。彼女は毎日泣いていた。スライマーンが「どうしたのだ?」と聞くと、彼女は、「父のことを悲しんでいるのです。私に父の肖像を描くことをお許しください。そうすれ

ば私はそれに慰められましよう」と言った。彼女は父の肖像を描き、40日間その絵に向かって跪拝していた。ジブリールが「スライマーンのもとに」来ることを止めた。アーサフ¹⁴⁾の知るところとなり、彼はスライマーンに伝えた。そしてその絵は壊された。その後、ジブリールがやって来て、言った。「おまえの家で肖像が崇拜されていた[期間の]分だけ、王国はおまえから離れよう」と。40日後、[王国は]彼に返された。

またある者は「これはスライマーンの息子の死体だ」と言っている。スライマーンには1000人の妻がいた。スライマーンは「1000の寝床へ行けば、1000人の息子が生まれるだろう」と言った。[ところが]彼は契りに際し、「アッラーがお望みならば」と言わなかった。そのため、彼にはこれらすべての妻からたった1人の不具の息子しか生まれなかった。デーヴ(悪鬼)たちは「俺たちは父親と同じくらい息子に苦勞するだろう」と言い、彼(息子)を殺そうと企てた。スライマーンは息子を雲に託した。創造主は死の天使に「スライマーンは息子を雲に託し、われに託さなかった。彼(息子)の命を奪え。そして命なきその身体を彼(スライマーン)の玉座の上に落とせ」とおっしゃった。この死体こそが[むくろの]像である。

<サリーラ¹⁵⁾にある像>

ヒンドゥスターンのサリーラの町に石造りの1軒の家がある。その中に1体の像があり、片手は[隠すように]顔に当て、もう一方の手は宙に伸びている。その像の顔を見たい場合には、その[宙に伸びた]手の上に何らかのものを置く。すると[像は]左手を顔から離す。そこには老人が1人座っており、[像の手に置かれた]ものを取っていく。

<ブルール(Bulūr)¹⁶⁾にある像>

ブルールの境域には、年に3ヶ月しか日が差さず、残りの9ヶ月は真っ暗な場所がある。そこには女に似せて作られた1体の偶像がある。像には2つの大きな乳房がある。病人をそこへ連れて行き、手を像の乳房に当てると、乳が滴る。病人がそれを飲むと病気が癒える。もし滴らなければ[病人は]死んでしまうので、[死にゆく]病人はその地で遺言を遺す。これは珍しいことである。

<ルームにある像>

ルームには1体の娘の座像がある。その像は泣いており、(p.340)袖で涙を拭っている。[その地の人々は]旅人を試し、「これこれの娘が不幸に見舞われている。彼女を楽しませてくれないか」と言う。旅人は彼女にいろいろと話しかける。しばらくして[旅人は]外に出てくると、「何も効果がなく、彼女は話を聞いてくれないよ」と言う。

<別[の像]>

ケルマーンシャーハーン¹⁷⁾に泉があり、その上には石像がある。その像を倒すと、水が止まる。

14) スライマーンの宰相 [本訳注(1)『イスラーム世界研究』第2巻2号、2009年、213頁]。

15) 東南アジアに栄えたシュリーヴィジャヤのこと。本訳注(5)、429頁を参照。

16) 『世界の諸境域』によると、ブルールはマウラーンナフルにある広大な地方で、太陽の子を自称する王がいる。その王は太陽が昇る前には起床せず、「子は父の前に起きない」と語っているという。なお、「ブルール」という読みは、注釈者のMinorskyに従った。また、ムカッダシーの地理書に、バダフシャー地方にある鉱山の名としてBLLWRがあげられているが、詳細は不明 [Hudūd al-‘ālam, pp. 121-122 (Minorsky comment, pp. 121, 369); al-Muqaddasī, Kitāb aḥsan al-taqāsīm, p. 303]

17) イラン西部のケルマーンシャーのこと [本訳注(5)、451頁]。少し先に述べられるシャブディーズの像に関する

真っ直ぐに立たせると、水が湧き出す。石〔像〕が倒れると、生娘たちがやって来て〔像を〕元に戻す。大量の水が像の下から流れ出ている。

<ミスルにある像>

ミスルの荒野に1本の柱がある。柱頭には女の座像があり、道を指し示している。鳥がその上にとまると、羽根が燃えて下に落ちてしまう。そこを通る旅人はそれを拾う。まことにアッラーこそは最もよく知りたまうのだが、その柱はナフサの上に設けられており¹⁸⁾、炎が上昇し、鳥を焼くのである。

[タドゥムルにある像]

タドゥムル(バルミラ)¹⁹⁾には2体の像がある。岩の上に作られた2人の娘〔の像〕である。それについては多くの詩が詠まれている。例えば、

タドゥムルの双像の何が驚かせるのか 思慮深き人々や愛情深き者たちを
 長き年月が過ぎけれども、一度として 愛情と抱擁に倦むことはない²⁰⁾

ムハンマド・ブン・ハージブ (Muḥammad b. Ḥājjīb) いわく、

タドゥムルよ、汝の双像、それはわが心の
 熱愛である、何にも比せない熱愛
 汝らのことを想い、私の眠りは飛び去ってしまう
 安眠が寢床に訪れんとするまさにそのとき²¹⁾

以上のことをまとめると、像は人の心に影響を与え、絵師たちの技の見事さやそこからくる感動は大きいということである。

<カルミスイーン(ケルマーンシャー)にあるバルヴィーズの宮殿とシャブディーズの像>

カルミスイーンには、ホスロウ・バルヴィーズの宮殿があり、その中には数々の不思議な像がある。宮殿から1ファルサングのところにはシャブディーズの像がある²²⁾。男が石の馬に乗り、胴鎧を身につけている。鎧にはくさびがはっきりと見えている。その像を描いたのは、カイトゥース・ブン・スィニンマルである。スィニンマルはクーファのハワルナク²³⁾を建てた人物である。またシャブディーズは、(p. 341) ヒンドウスターンの王がバルヴィーズに贈った馬である。〔シャブディーズは〕鞍や手綱をつけている間は、小便をしたり鼻を鳴らしたりしなかった。蹄の大きさは手のひら6つ分であり、象よりも大きかった。蛇がそれを噛み殺した。バルヴィーズは嘆

記述を参照。

18) ここは“BADAFT bar sar-i nafāta”となっているが、BADAFTの意味はよくわからない。「混ざった (bi-idāfat)」ないし、「風が吹く (bād uft)」か。この語は後にもう一ヶ所で見られる。サーデギー校訂本では「まことにアッラーは」以下「カルミスイーン」までの文章は欠落している。

19) タドゥムルの町については、本訳注(4)、注156、512頁参照。

20) イブン・ファキーフの地理書では、アブー・ドゥラフの詩として同一の詩のより長いバージョンが見られる [Ibn Faqīh, *Muḥṭaşar kitāb al-buldān*, p. 110]。

21) 『諸都市辞典』ではより長く引用されている [Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 2, p. 18]。

22) ケルマーンシャー近郊のターケ・ボスターンにあるこのレリーフについては、守川知子「伝説から史実へ——イラン・イスラーム社会における古代遺跡と歴史認識」(『歴史学研究』859(増刊号)、2009年、169-177頁)を参照されたい。

23) この宮殿については、本訳注(5)、408頁を参照。

き、ジャーバーン (Jabān) の村にその像を造るよう命じた。[完成した] 像を見ると、まるで生きているかのように大いに驚き、言った。「これは、『死』すなわち我々が一切動かなくなることを伝えているのだ。」

英知ある人々は、「この像は人間が造ったのではなく、創造主がお創りになったのだ」と力説して述べている。ルームの不信心者のある者はそれを見たとき、「この像には神の秘密があるのだ。それはいつか明らかになろう」と言った。一部の賢人たちはこうも言っている。「フェルガーナや最果てのスース²⁴⁾ からこの像を見にくる人がいても、咎めることはできない。」

よく考えればわかることだが、もしこの像が人間の造ったものであるならば、実に驚くべきことである。というのも創造主が人に天啓を与え、石からこのような像を造らせたり、あるいは石を思うがままに扱わせたりしたのだから。結果、その者は色とりどりの石を組み合わせ、黒くあるべき部分は黒く、赤くあるべき部分は赤くしたのである。その両目の瞳の部分は黒くなっており、その[瞳の]まわりは白く、耳や耳たぶは赤い。

大多数の者の意見では、この像やその周辺にある像はファルハードが造ったとされる。ファルハードは勇敢で浅黒く、繊細な男であった。彼はパルヴィーズに仕えていた。パルヴィーズにはシーリーンという名の妻がいた。ファルハードは彼女を愛しており、ホスロウはそのことを知っていた。[ホスロウ・パルヴィーズは] 家畜の世話をさせるために、ファルハードをこの荒野に送った。ファルハードはこの山に彼²⁵⁾ の姿を彫った。その後、彼はビーストゥーンの山に送られ、山を3本の柱で支える [ように掘る] よう命じられた。その一部を掘ったとき、シーリーンが死んだという知らせが彼に届いた。彼は憤りからつるはしを山の上に突き立てた。時が経ち、つるはしの柄からザクロの木が生えた。誰もその山の上に行くことはできない。ファルハードもまた死んだ。

<逸話>

知れ。このシーリーンは王族の出身で、貴く、非常に貞節であった。(p.342) パルヴィーズは彼女を愛していた。彼女は何百万ディーナールも費やして数多くの橋や隊商宿を造ったと言われている。彼女はルームの生まれであり、パルヴィーズは彼女の意見に従っていた。シールーエは自分の父であるパルヴィーズを殺害した。彼はシーリーンに使いをやり、「私の妻になれ」と伝えた。彼女は答えた。「私はあなたの母です。私があるあなたを産んだわけではないとはいえ、私はあなたと夫婦にはなりません。」

シールーエは彼女のいくつもの宝物庫を略奪し、シーリーンのことを悪しざまに言い、[彼女を] 悩まし続けた。シーリーンはもはや耐えきれず、言った。「この男は自分の父を殺し、私の財を強奪した。私は彼の手から身を守ることはできないだろう。せめて彼に罫を仕掛けよう。」

彼女はシールーエに伝言を送った。「あなたが3つのことをしたら、私はあなたの妻になりましょう。私の財産と宝石を返しなさい。パルヴィーズに手を下した者を殺しなさい。そして、軍を集めてこう言いなさい。『私がシーリーンを悪しざまに言ったのは、腹立ちにまかせてのことだ。私は嘘をついていた』と。」

シールーエはすべての財産と宝石を彼女に返し、パルヴィーズの殺害者の首をはね、「シーリー

24) モロッコ南部を指す。

25) ここでの彼(もしくは彼女)をホスロウと解すが、ターケ・ボスターンには女神像も数多くあり、ファルハードの想い人のシーリーンと解することもできる。本書の著者と同時代の詩人ニザーミーの『ホスロウとシーリーン』でも「鑿をもって岩盤にシーリーンの姿を、さらに鋭い鑿でシャブディーズにうち跨る王(ホスロウ)の姿を彫った」とある [ニザーミー、岡田恵美子訳『ホスローとシーリーン』平凡社東洋文庫、1977年、173頁]。

ンについて私が言ったことは、嘘であった」と軍に伝えた。シーリーンはその財宝や宝石のすべてを燃やし、すべて[の建物]を破壊し、シールエに言った。「私には、あなたの父パルヴィーズから託されたものがあります。私は彼の墓に行き、[それを]彼に渡してきます。私たちは今夜、婚礼の儀を行いましょう。」

彼女はパルヴィーズの墓に連れて行かれた。彼女は指輪を持っており、その石の中には毒[が隠されていた]。彼女はそれを飲み、パルヴィーズの墓に倒れ込んで死んだ。

この逸話はこの女の貞節さを伝えている。私は良かれと思ってこの話を引用した。パルヴィーズが作った彫像や図像は多いが、このくらいで十分であろう。

<ヒンドにある像>

ヒンドゥスターンには、KLBA²⁶⁾と呼ばれる町がある。その町には1本の柱があり、柱頭には1羽のカモ[の像]がある。翼を広げ、首を伸ばしている。ムハッラム月10日になると、その柱の下にある泉が水でいっぱいになり、そのすべてをこのカモが飲み干す。柱頭には穴が1つ開いており、[カモは]その穴に水を流し込む。翌年には[再び]柱の下から流れ出し、KLBA全体が水で満たされる。

(p.343) <アルメニアにある像>

アルメニアに山があり、山上には羊の石像がある。喉の渴いた人がそこにやってきて、像の口に口をつけると、像の口から水が流れ出し、渴きを癒す。その山の周辺には狼がまったく寄りつかない。このまじないは驚くべきものである。まことにアッラーは最もよく知りたまう。

[ヒンドゥスターンのライオンの像]

ヒンドゥスターンに山があり、山上には2頭のライオンの像がある。[かつて]双方の口から水が流れ出していた。そこには2つの町があり、その水によって両者とも繁栄していた。やがて[2つの町の間に]敵対心が生じ、ライオンの口は壊され、水が出なくなってしまった。その口を黄金で直したが、水は出なかった。これらの町は荒れ果てたままである。

<別の[ライオンの]像>

タンジャ地方には砦で造られた建物があり、中には銀製のライオン[の像]がある。人がその上に座り、輝く鏡を手を持っている。病人がそれを覗き込み、自分の姿が見えたならば回復し、見えなかったならば死ぬ。

<カイラワーンにある像>

カイラワーンには石で造られた建物がある。その中にはトルコ石製の玉座があり、そこにはジンたちの姿が彫られている。全部で4体の姿が描かれている。互いに手と手を取り合い、互いに語り合っているが、その内容は理解できない。この2つ²⁷⁾は固体(鉱物)でありながら話をするのである。その理由は誰にもわからない。

26) チベットに属する小さな町の名として挙がる KLBANK (K.l.bānk) を指すか [Hudūd al-'ālam, p.76 (Minorsky comment, pp.94, 262)]。

27) 全部で4体のはずなので、「4つ」の間違いか、4体のうちの2体が会話をするのか、そもそもが「2体」の間違いか、いずれかであろう。

像についてはこの程度のことを述べておこう。「神にこそお力がある」と知ることに益がある。すなわち、[そのお力で神は] 人間をお創りになり、[人間は] 明敏さでもってこのような技をなし得るのである。今まで述べた話はすべて、もし本当のことが語り伝えられているのなら、[まさに] 創造主の御業である。偽りが述べられているとしても、私には確かめる術がない。言われてきたことを述べたまでである。まことにアッラーは最もよく知りたもう。

[第4章] 墓とその驚異について

この後は、さまざまな地域にある預言者や王の墓について述べていこう。それについて思いをめぐらし、(p.344) 彼らの最期がどのようなものであったかを知るために。「ものごとの最後とは、おまえが墓や墓石や墓土に見るものである」と言われているように。クッス・ブン・サーイダ (Quss b. Sā'ida)²⁸⁾ は「最も良い忠告とはいかなるものか」と問われると、「最も深遠な訓戒とは、死者の場所を見ることである」と答えた。すなわち [ペルシア語では]、「最も良い訓戒は、墓場に目を向けることである」と。

最初に述べる墓は、次のようなものである。

<アードム——彼に平安あれ——の墓>

アードム——彼に平安あれ——の墓はサランディーブにある²⁹⁾。半分は陸地に、半分は海の中にある。枕部分 [にあたる頭] は陸にあり、20 アラシュの長さがある。足は水中にあり、40 アラシュである。陸にある部分は高く峻険であるため、誰もそこにたどり着けない。水中にある部分は、魚がそのまわりを周回しており、墓から遠ざかることも近づくこともできない。もし魚や動物が彼の墓に行き当たると石化する。石になり、海底へと沈むのである。アードム——彼に平安あれ——は顔を東に向け、手を口にあて、もう一方の手をへその下に置いている。これは、「言葉に気をつけよ、女陰に気をつけよ」ということを示している。

<伝承>

伝承で語られるところによると、ある日、アードム——彼に平安あれ——が座っていると、彼の孫の幼な子が1人、アードムの脇腹に足をかけ、はしごのように昇って彼の肩に座り、そして降りてきた。ある人が、「おお、アードムよ。この子は遊んでいます。あなたは [ただ] それを見ているのですか」と言った。アードムは言った。「私は何も言えない。というのも、以前、私が少し動いたら、頭が天国に突き抜けてしまった。だから、私が何かを言い、私の煩いごととなるのを恐れるのだ。』

知れ。サランディーブの海は、水が黒い。アードムの墓は半分が水中に、半分が陸地にある。彼の墓の上には巨木が生えている。その実はナツメのようである。またその葉からは、夜も昼も絶え

28) アラビア語古典文学に登場する半ば伝説的な人物で、雄弁家。その言葉の多くは諺になっている [EP: Kuss b. Sā'ida]。

29) サランディーブ(セイロン島)とアードムの墓の描写は、本訳注(5)、426頁に見られる内容とほぼ同じである。

間なく、彼の墓の上に10万滴の真水が雨のように滴る。誰もこの墓の上に行くことはできないが、この水はいくつかの貯水槽に溜まり、サランディーブの人々はそこから水を飲む。墓のまわりにはたくさんの箱が置かれ、囲いが設けられている。ムスリムや不信心者やユダヤ教徒やキリスト教徒の修行者たち(mu'takifān)が暮らしているが、ヒンドの人々はそこに近づかない。(p.345) その墓を参詣するヒンドの人は裸になり、修行庵の中に暮らす。そのような者には、現世の愉楽が死ぬまで禁じられる。この墓はクルズム(紅海)のほとりにある。一端はカーフの山に、一端は「闇の世界」に、一端は水に「接している」。

<ダーウード——彼に平安あれ——の墓>

ダーウード——彼に平安あれ——の墓は聖なる家(イェルサレム)にあり、イブラーヒームの墓の近くにある。遠く離れていても、そこからは麝香の香りが漂ってくる。その理由は、次のとおりである。

ダーウードは、巨大な王国を有していた。彼の寿命が尽きるとき、死の天使が男の姿でやって来た。そしてダーウードの妻の隣に座り、彼女と言葉を交わした。スライマーンの母は、「私の夫は嫉妬深い方です。離れてください」と言った。ダーウードが入ってきた。死の天使は玉座の端に行った。ダーウードは言った。「ここで何をしているのか？」

[死の天使は] 言った。「おまえは、私がおまえの妻と話をしたことに腹を立てたか？」

[ダーウードは] 言った。「そうだ。」

[死の天使は] 言った。「ウーリヤー(Uriyā)もまた、おまえが彼の妻を娶ったとき、腹を立てたのだぞ³⁰⁾。私は死の天使だ。」

ダーウードは言った。「死に際して咎められるような罪をどうかお赦してください。」

その後、[死の天使は] ダウードの命を奪い、彼を墓の中へ入れた。

王国の人々は泣いた。スライマーン——彼に平安あれ——はハゲタカたちに命じて翼を広げさせた。そうすれば、太陽を遮ることができるからである。そして荒野に麝香をまき散らし、麝香でいっぱいにした。現在でも麝香の香りがその荒野から漂ってくる。

<イブラーヒーム——彼に平安あれ——の墓>

さて、イブラーヒーム——彼に平安あれ——の墓も聖なる家の同じ場所にある。死の天使は弱々しい男の姿で彼の前にやって来た。イブラーヒームは彼を歓待したが、彼は料理を食べられず、老衰ゆえに、彼の口の端から食べ物がこぼれ落ちていった。イブラーヒームは言った。「おお、ご老人よ、あなたの歳はおいくつか？」

[死の天使は] 「これこれの歳だ」と言った。イブラーヒームの年齢より10年多かった。

イブラーヒームは言った。「おお、神よ。私の命を奪いたまえ。死の天使を遣わし、私の命を奪わせずように。はしたなくて卑しいこのような老人に私がならないためにも。」

すると、その老人が言った。「我こそが死の天使である。」

イブラーヒームは言った。「信じましょう。かつて、私を生かしてくれるよう神に乞い求めたところ、(p.346) [神は] 言いました。『おまえが祈りによって死の天使をわれに望むまで、われはお

30)『旧約聖書』サムエル記によると、ダビデ(ダーウード)はウリヤ(ウーリヤー)の妻バト・シェバを見初め、姦通の罪を犯した。ダビデはウリヤを謀略によって殺害し、バト・シェバと結婚する。のちにバト・シェバはソロモン(スライマーン)を生んだ。この話は『クルアーン』には見られない。

まえを死なせない』と。」

その後 [死の天使は] 彼の命を奪った。

<ハールーン(アロン)——彼に平安あれ——の墓>

さて、ハールーンの墓はティー砂漠にある³¹⁾。ムーサーとハールーンがティー砂漠に入ったとき、ハールーンは緑の山を見た。その上には洞窟があった。そこからは光が溢れ出し、中に黄金の玉座が置かれていた。玉座には何枚かの美しい布がかけられていた。そこには、「誰であれ、この墓に背丈の合う者は、ここがその者の場所となる」と書かれていた。ムーサーはそこに寝てみたが、合わなかった。ハールーンが横になると、彼の背丈にちょうど合った。美しい人の姿をした死の天使がやってきて、彼の命を奪った。このため、修士たちは洞窟の中に埋葬されるのである。ムーサーは [ひとりで] 引き返した。イスラエルの民は、ハールーンが柔和だったことから彼を好んでいた。彼らは「ムーサーがハールーンを殺したのだ」と言い、それが原因でムーサーを迫害したのであった。

<ムーサー——彼に平安あれ——の墓>

ムーサーの墓がどこにあるのかは、誰も知らない³²⁾。人は死に対して何もし得ないが、ムーサーとてそうであった。至高なるアッラーは言った。「ムーサーよ、私は、すべての被造物は死ぬのだと定めた。もしおまえが望むならば、おまえに1000年の寿命を与えよう。だが最後にはやはり死ぬのだ。」

その後、死の天使がやってきた。

[ムーサーは] 言った。「どこから命を奪うのですか？」

[死の天使は] 「口からだ」と言った。

[ムーサーは] 言った。「私は『トーラー(律法)』を口で詠んでいます。」

[死の天使は] 「では耳からだ」と言った。

[ムーサーは] 「私は『トーラー』を耳で聞いています」と言った。

[死の天使は] 言った。「ムーサーよ、酒は飲むか？」

[ムーサーは] 「いいえ」と答えた。

[死の天使は] 言った。「おまえの口の臭いをかいでみよう。」

[ムーサーは] 言った。「どうぞ。」

天使はムーサーの口に口をつけ、彼の命を吸い取った。ムーサーは160歳だった。

<ヤアクーブ——彼に平安あれ——の墓>

ヤアクーブの墓はシャームにある。死期が近づいたとき、彼は聖なる家(イエルサレム)を目指した。そしてユースフに対して、「おまえが死にそうになったら、聖なる家を目指せ。ファラオたちの地であるミスルを去れ」と言い残した。[ヤアクーブは] イブラーヒームの墓に到着した。墓

31) 本訳注(4)、524頁参照。『旧約聖書』民数記(20:22-29)によると、イスラエルの民が「エドムの国の端にあるホル山」に宿営したとき、アロン(ハールーン)は神の命令によりホル山に登り、その場所で没したという。

32) 『旧約聖書』申命記(34:1-8)によると、モーセはヨルダン川東岸のモアブ山の頂きに登り、そこで没したという。だが申命記でも、「主はモーセをベト・ペオルの地にある谷に葬られたが、今日に至るまで、だれもかれが葬られた場所を知らない」(34:6)と記され、また本訳注(5)、378頁では、モーセ(ムーサー)はティー砂漠の「地獄の谷」という場所で没したとされているが、墓への言及は見られない。ちなみに『旧約聖書』では、モーセの年齢は120歳である。

を見て、天使たちを見た。[ヤアクーブは]「これは誰の墓でしょうか」と尋ねた。[天使たちは]「これは (p.347) 気高いしもべのものだ」と答えた。[ヤアクーブは]中を見て回った。いくつかの黄金の説教壇が見え、美しい一団が腰掛けていた。彼はその者たちの方へ向かった。すると天使が「この飲物を飲み干すまでは、そこには行くな」と言った。[ヤアクーブが]それを飲み干したところ、彼は息を引き取った。彼は、イスハークとイブラーヒームとサーラー——彼らに平安あれ——の墓の前に埋葬された。

<ユースフ——彼に平安あれ——の墓>

ユースフ——彼に平安あれ——の墓は、当初はミスルにあった。ヤアクーブが亡くなったことを聞いたとき、[ユースフは]悲しんだ。彼は言った。「あなたは、わたしをムスリムとして死なせ、正義の徒の中に加えて下さい」[Q12: 101]と。すなわち、「私を父祖のもとに送ってください」という意味である。ユースフが現世から旅立ったとき、ナイルの向こう岸に埋葬された。そちらの方では豊作や恵みがもたらされ、反対にこちら側では飢饉や困窮に陥った。ライヤーン・ブン・アル＝ワリード³³⁾はユースフの息子であるイフラーイム(エフライム)・ブン・ユースフ(Ifrāyīm b. Yūsuf)のもとに人を遣わし、「ユースフの棺をこちら側に持ってくるように」と言った。

棺がこちら側に持ってこられると、豊作や恵みがもたらされ、あちら側は飢饉となった。そのため、2つの集団は敵対した。その後、彼らは棺をナイルの川底に埋葬することで合意した。鉛の管をいくつか作り、互いにつなぎ合わせて川底まで延ばし、管の中の水を汲み出した。[管の水が引いたところで]棺を川底に運び、埋めた。管を外すと、水が墓の上に流れ込んだ。両岸が豊作になった。

その棺はムーサー——彼に平安あれ——の時代までそこにあった。その後、サーリフ・ブン・イスラーイール・ブン・ヤアクーブ(Sāriḥ b. Isrāyīl b. Ya‘qūb)がムーサーに言った。「もし私がユースフの遺骨をあなたに教えたら、あなたは私に執り成しを行ってくれますか?」

ムーサーは「よかろう」と言い、サーリフは「これこれの場所の川底にあります」と言った。[ムーサーは]棺を引き上げて聖なる家に運んだ。[ユースフの棺は]ヤアクーブの墓の前に埋葬された。

<ダーニヤール——彼に平安あれ——の墓>

ダーニヤールの墓はシューシュにある³⁴⁾。アブー・ムーサー・アル＝アシュアリーがシューシュを手に入れたとき、彼は多くの宝物庫を暴き、奪った。だが1つだけ宝物庫が残り、人々はそれを引き渡さなかった。彼らは言った。「この中にはダーニヤールの棺があります。この遺骸はテュルク人たちのもとにありました。町々に飢饉が生じ、それは長い間続き、元に戻りませんでした。私たちは一族の者70人を抵当に (p.348) この棺をテュルクたちから借り受けました。[ダーニヤールの]遺骸で雨乞いをするためです。その後、元の場所に送り返すつもりです。」

アブー・ムーサーが宝物庫を開けると、玉座があり、そこには手を膝に置いた人物が座っていた。指にはめられていた指輪には、両脇にライオンを配して、その人物の姿が描かれていた。

その理由は次のようなものであった。母親はダーニヤールを荒野で産み、そして死んだ。創造主

33) ユースフの時代のファラオとして既出 [本訳注(5)、479頁]。

34) ダーニヤール(ダニエル)の遺骸がシューシュにあることについては、本訳注(4)、503頁および同(5)、397頁で述べられている。

は雌のライオンを1頭選び、ダーニヤールに乳を与えさせた。また、雄のライオンが彼のために狩りをし、そうしてダーニヤールは育てられた。[ダーニヤールは]2頭のライオンを指輪に描き、自らの姿をその2頭の間に描いた。つまり、「この2頭の獣が私を育ててくれたことに感謝を表す」ということである。

アブー・ムーサーは、[カリフの]ウマルに「私はこのようにしてダーニヤールの棺を見つけました」と知らせを送った。[ウマルは]「それには手を出すな。彼らから取り上げてはならない」と返事を送った。

アブー・ムーサーは棺をガラスの棺に入れ、シューシュの町の川底に埋めた。そして、水を流し入れ[誰の手にも触れないようにし]た。

[ダーニヤールの]墓のまわりでは魚は安全であり、誰も魚を獲ることはない。魚たちは彼の墓の上で眠り、牛ほどの大きさにもなる。この魚たちの驚くべきことの1つは、不当に得られたパンを投げ与えても食べようとしないことである。法に合った(halāl)パンを投げ入れると、魚たちはわれ先やってきてそれを奪い合う。

またアブー・ムーサーはこの宝物庫の中で何冊かの書物を見つけ、それをカアブ・アル＝アフバルに渡した。

<「洞窟の仲間たち(aṣḥāb al-kaḥf)」³⁵⁾について>

「洞窟の仲間たち」の墓は恐ろしい洞窟である。ウバーダ・ブン・アル＝サーミト(‘Ubāda b. al-Ṣāmit)³⁶⁾は言う。「戦が起ころうになり、誠実なるアブー・バクルは私を使者としてルームの王のもとへ遣わした。コンスタンティノーブルに到着すると、赤い山が見えた。そこには洞窟があり、入り口には鉄の門があった。我々がそこに行くと、頭から毛布をかけ、隣り合って眠っている13人の男がいた。その中には若者や老人がいた。男の1人は顔の前に剣が置かれていた。人々は語った。『私たちは毎年この洞窟に来て、彼らの顔から土を払い、彼らの爪や口ひげを切っています』と。私は『この人々は誰でしょうか?』と尋ねた。彼らは言った。『イーサー——彼に平安あれ——よりも(p.349)400年前の預言者たちです。それ以上は知りません。』」

正しくは次のとおりである。彼らは「洞窟の仲間たち」ではない。というのも、洞窟の仲間たちは恐ろしい縦穴の中にいるのであり、そこは恐怖のあまり誰も中をのぞき込むことができないような場所なのである。「もしあなたがかれらの所に来たならば、きっと恐れ戦き走って逃げ出したことであろう」[Q18:18]と至高なるお方のお言葉にあるように。彼らは「7人の王子たち」であろう³⁷⁾。

<「ラキームの人々(aṣḥāb al-Raqīm)」³⁸⁾について>

35) 『クルアーン』の洞窟章(18章)で触れられており、キリスト教の伝説の「エフェソスの7人の眠り人」のこととされる。概要は、エフェソスの7人の王子がキリスト教に改宗したために当時のローマ皇帝から迫害を受け、洞窟に逃げ込んだところ、入り口を塞がれ、そこで眠ってしまった。数百年ほど経って目覚めたら、ローマ帝国がキリスト教を公認した後だった、というものである。

36) 2度の「アカバの誓い」で宣誓を行い、バドルの戦いにも参加した教友、‘Ubāda b. al-Ṣāmit b. Qays b. Aṣram al-Anṣārī al-Sālimīのこと(654/5年没)。第2代カリフ、ウマルによりシリアのカーディーとして派遣され、ヒムスに居住した。死後エルサレムに埋葬され、その墓は14世紀にもよく知られていたという[al-Ṣafādī, *Kitāb al-wāḥī*, vol. 16, pp. 618–619]。預言者ムハンマドから直接見聞きした言行を数多く伝えており、様々なハディースのイスナードでその名が挙げられている。

37) 洞窟の中に眠るのは13人であるが、ここではエフェソスの「7人の王子」として言及されている。キリスト教とイスラームの伝承が混交し、解釈が未だ確立していない様子が窺えよう。

38) “al-Raqīm”は、洞窟の人々について述べた『クルアーン』18章9節に見られる語であるが、その意味については、

さて、「ラキームの人々」とは、至高なる神の特別な「恩寵を受けた」人々に属す者たちである。信徒たちの長ワースイク・ビッラー³⁹⁾は、ムハンマド・ブン・ムーサー (Muḥammad b. Mūsā) をルームの地方に派遣し、「ラキームの人々」について報告させた。

「ムハンマドは」言った。「我々はある山に登りました。そこには 300 歩の奥行き横穴がありました。その中には家々があり、家の中には死者たちがいました。1 人の男がそこに座っており、人々が死者を見ようとするのを禁じていました。男は『彼らを見る者には災いが起こる』と言いました。しかし、私は彼らを見ました。全員、粗布に包まれており、手足は香油 (ṣabir)⁴⁰⁾ とタールに浸けられ、樟脳がまかれていました。1 体の胸の上に手を置いてみたところ、その胸毛はこわばっていました。私たちが「外に」戻ると、墓守が食事を運んできました。その中には毒が仕込まれていました。誰かが死に、『[彼が死んだのは] 死者たちを見たためだ』と人々が言い合うようにするためです。私たちはそれに気づき、その食事を食べずに帰りました。『かの人々は何者か』と尋ねますと、『ラキームの人々だ』と言われました。」

まことにアッラーは最もよく知りたまう。

知れ。墓には際限がない。被葬者の名を誰も知らないこともあろう。[ここで] 墓について引用したのは「先例から学ぶという」訓戒のためであり、ただ記憶するためではない。

<イドリースの子——彼ら 2 人に平安あれ——の殉教地について>

東の地方に 1 つの砦がある。流砂の中にあり、近づきたい場所である。鉄の門があり、その上には銅製のライオンが 1 体ある。ライオンの口からは火が燃えさかっている。1 人の王がその地に至り、[これについて] 賢人たちに質問した。彼らは答えた。「おそらく油田があり、火が内包されているのでしょう。このライオンはその真上に据えられているので、その口から火が燃えさかっているのです」と。王が命じてそれを取り外させると、空洞が現れた。中にはオニキス製のイーワーンがあった。誰であれそのイーワーンに近づくと、その者に向かって叫び声が起こり (p. 350) ただちに死んでしまうのであった。だが「周囲には」誰ひとりとしていなかった。この王が賢人たちに尋ねたところ、彼らは、「このイーワーンにはイドリース——彼に平安あれ——の子の 1 人の墓があります。ですが、それ以上のことはわかりません」と答えた。王は引き返した。

こういった話は「世界中の」多くの地域にある。

<[マドヤンの] 墓>

フザーア族 (Banī Ḥuzā'a)⁴¹⁾ のある人が言う。「私は荒野でライオンの声を聞いて、洞穴に逃げ込んだところ、1 人の長身の人物を見ました。彼は鎖帷子を着て脚絆を身につけ、腰帯を締めていました。銘版には次のように書かれていました。『私はイブラーヒームの息子マドヤンの息子マドヤン (Madyan b. Madyan b. Ibrāhīm) なり⁴²⁾。私には 1000 人分の力があつた。私には 1000 年もの寿命

山の名前、村の名前、洞窟の人々とともにいた犬の名前など諸説ある。

39) アッバース朝第 9 代カリフ。本書において、彼の時代に関する逸話は多い。本訳注 (5)、428-429 頁参照。

40) 植物のアロエを意味する語。

41) アラブのアズド族の 1 氏族。アズド族がメッカを離れた際にメッカに留まり、フザーアの名で知られるようになった [EI²: Khuzā'a]。

42) マドヤンは、『旧約聖書』に見られる古代パレスチナに居住していたミデヤン人、およびその居地を指す。『クルアーン』では、同胞のシェアイブによって警告されたにもかかわらず、従わなかったため、アッラーによって滅ぼされた [Q7: 85-93, 9:70]。

があった。私は1000の軍を敗走させ、1000もの町を征服し、1000人の女を娶った。私は医学や種々の薬草の性質や自生地についての知識を修めた。しかし死に対してはなす術がなかった。あらゆるものは消滅する。ただ創造主を除いては。主は我々を消滅のためにお創りになり、永遠の館へお呼びになる。賢き者は明日を悲嘆し、無能な者は無為に過ごす。』

<墓>

ある砂漠で墓が見つかった。中には銅製の棺があり、それには黄金の錠がついていた。開けると中に死体が1つあった。タールが塗られ、2つの碧玉を首につけていた。その人物の白布には血で次のように書かれていた。「私はアル=ハーリス・ブン・ジャバラ・〔アル=ガッサニー〕 (al-Hārīt b. Jabala [al-Ġassānī])⁴³⁾ なり。預言者シュアイブ——彼に平安あれ——が我が民に私を遣わした。だが彼らは私を欺いた。彼らに我が主の災いあれ。」

<いくつかの墓>

ルームに1つの聖堂があり、そこにはシャムウーン(シモン) (Šam‘ūn) とバールース(パウロ) (Bālūs)⁴⁴⁾ の墓がある。ルームの王は毎年そこに行く。彼は剣を持ち、墓を開いてシャムウーンの髪を切り、爪を整える。そして「切った毛髪や爪を」王国の人々に分け与える。900年の間、このようなことを続けている。その地には1200枚の黄金の板があり、それらは地面に敷き詰められている。壁には錦がかけられ、埃が積もらないようにしている。そこには1本の紅いルビーでできた柱が据えられている。それは夜に光を放ち、その光で本を読むことができるほどである。ルームの町の人々は、あごひげをすっかり剃っている。それは、シャムウーンと高弟たちがあごひげを剃られ打擲されたためである。ルームの町の人々は、(p.351) シャムウーンが正しかったことを知ると後悔し、その償いのために自らのあごひげを剃った。この殉教の地こそ、「オリーブの聖堂」のあるところである。

この後は名高き王たちの墓について述べていこう。至高なるアッラーが望みたもうならば。

<タフムーラス王 (Malik Ṭahmūrāt)⁴⁵⁾ といにしへの諸王の墓 (daḥma) >

タフムーラス王の墓はとある山の上にある。その山は「バンダーラーブ (BNDARAB)」と呼ばれ、黒い人々の国にある。

彼は偉大な王で、「ディーヴバンド (Dīwband)⁴⁶⁾」と呼ばれていた。ミフラージュ王⁴⁷⁾ がその地に至り、白い大理石でできた城を見た。その先端には1人の騎手〔の像〕があり、その砦の門を守っていた。騎手は片手を手綱に、片手を馬の臀部に置いていた。〔中に入ろうと〕足を階段にかける者がいると、その騎手は魂が体から飛び出してしまうほどの叫び声をあげるのであった。

43) 東ローマ帝国に軍事力を供給し、シリア・パレスチナ地方を支配したガッサーン朝の君主 (在位 529-569年)。キリスト教の単性論の信者であったと伝えられる。〔「ガッサーン朝」『古代オリエント事典』; EP: al-Hārīt b. Djabala〕。本文中にある、預言者シュアイブとの関係や「民の裏切り」との関連は不明である。

44) おそらくはローマにある聖パウロの墓と使徒ペトロ (本名シモン) の墓を指すのであろう。本項目の最後に挙がる「オリーブの聖堂」については、本訳注 (5)、374-375 頁に既出。

45) イランの伝説の王朝であるピーシュダード朝の第2代君主。野生動物を初めて家畜化した人物とされている [EP: Ṭahmūrāt]。

46) 「悪鬼 (ディーヴ) を縛るもの」という意味。タフムーラスの異称。

47) ヒンド (インド) の王を指す一般名詞。本訳注 (4)、注 298、540 頁参照。

ミフラージュはその階段を掘り返すように命じた。1つの穴があり、その中に歯車があった。[王が]それを破壊すると、その騎手は倒れ落ちた。城に登ると、ラピスラズリの館が見えた。その中には麝香で満たされた黄金の棺があった。[棺の]中には1人の者が横たえられており、金襴織りの布が顔にかけられていた。黄金の銘版があり、そこには次のように書かれていた。「私はフーシャングの子タフムーラス (Ṭahmūrāṭ b. Buṣānk) である。私がこの城砦を建設した。各々の価値が一国に相当するほどの宝石を私は集めた。ディーヴの背に乗り、世界中を駆け巡らせた。私が死んだとき、何が残っただろうか。おお、この場にたどり着く者よ、心をこの世につなぎとめるな。現世とは、例えるならば、雲の中の雷光のごときであり、火打石の中の火花のごときである。そこにはいささかの猶予もない。私の棺のまわりを回るな。ラピスラズリの館のまわりを回るな。その中にはアードムの指輪とハウワー (イヴ) (Ḥawwā) の腕輪——彼ら2人に平安あれ——があるのだから。」

ヒンドのミフラージュは [それを] 読み、大いに泣いた。彼はそこを詣でて麝香を撒き、竜涎香を焚いて帰っていった。

<スィヤーマク王の墓>

カユーマルスの子スィヤーマク (Siyāmak b. Kayūmart)⁴⁸⁾ の墓は、灼熱の地である南の境域にある。巨大な城であり、イーワーンの門はオニキスで造られている。その中に水晶の玉座があり、(p. 352) 黄金の像が置かれている。その手には紅いルビーの銘版があり、誰も読むことのできない文字が書かれている。

伝えられるところでは、アフラスィヤーブがカイ・ホスロウの軍から逃れたとき、その地にたどり着いた。[アフラスィヤーブが]「これは何か?」と尋ねると、修道士たちは言った。「これはスィヤーマクの墓です。彼は征服者たる王でした。彼が死んだとき、黄金で彼の像が作られ、この玉座に置かれたのです。」

アフラスィヤーブは「この文字を読んでくれ」と言った。その言葉を知っていた修道士が言った。「次のように書かれています。『私こそはカユーマルスの子スィヤーマクである。地上は私の命令の下にあった。鳥もディーヴも妖精も私に従った。私は1000年の寿命を手に入れた。世界中が私の支配下にあったが、天命が私に戦いを挑み、卑しき者たちと同じく、私は現世から旅立った。この世界では、私が実現したほどの望みを叶える者はひとりとしていなかった。だが [死に際して何も] 私に残らなかったように、誰のもとにも何も残らない。』」

<イスカンダルの墓>

イスカンダルの墓はイスカンダリーヤの山の上にある。その経緯は次のとおりである。

イスカンダルはフェルガーナに至り、さらにサマルカンドへ到達した。そしてジャイフーンの川を渡って「蟻たちの国 (mulk-i mūriyān)」⁴⁹⁾ にまで行った後、聖なる家 (イェルサレム) に戻ろうと

48) イランの伝説上の最初の王であるカユーマルスの息子であり、フーシャングの父。父の存命中にディーヴとの戦いで一騎打ちを申し込まれ、戦死 [Etr. Gayōmart, Hōshang]。

49) 巨大蟻の話はヘロドトス (103年没) 以来、ギリシア語の文献にしばしば現れる。アッリアノスは『インド誌』の中で、狐よりも大きな蟻が黄金を掘る話を伝えている。また偽カッリステネスの伝記にも、砂の国を通過しているときに、巨大な蟻が現れて兵士や馬が攫われたという逸話がある [アッリアノス、大牟田章訳『アレクサンドロス大王東征記』岩波書店、2001年、下巻260頁; 伝カッリステネス、橋本隆夫訳『アレクサンドロス大王物語』国文社、2000年、308頁]。一方本書では、ターリク・ブン・ズィヤードが、マグリブ (西方) でライオンほどもある蟻と遭遇して、撤退を余儀なくされるという逸話がある [本訳注(4)、517-518頁]。

していた最中に、彼は苦しみ出してダームガーンで没した。彼は黄金の棺に横たえられて、母親のもとへ送られた。彼の棺のもとには学識者たちが次々とやって来た。人々が集まったとき、アリストテレスは言った。「これは、すべての王たちがこの方の捕虜となった王である。今や、彼が[死に] 囚われてしまった。」

別の者が言った。「これは、昨日まで全世界が彼のものとなっていた王である。今日彼には何も残されていない。」

別の者が言った。「これは全財宝を集めた王である。今日、すべては散逸してしまった。」

別の者が言った。「これはすべての人々が彼に希望を抱いた王である。今日彼の希望は、創造主のお慈悲を除いて、すべて絶たれてしまった。」

棺がイスカンダリーヤに到着したとき、イスカンダルの母は棺に目を留めて言った。「おお世界の主よ。私をお赦してください。私に忍耐をお与えください。この我が息子に慈悲をお恵みください。」遠くからでも見えるように、彼の棺を高い山の上に運び、そこに埋めた⁵⁰⁾。

(p.353) <[ギリシアにある] 墓>

ギリシアの荒れ地に、表面に多少泥のついた巨大な岩がある。その岩の上に1人の人物が横たわっており、服を着せられている。それが誰なのか誰も知らない。彼がその岩に横たわって数千年になる。その地方では彼への参詣が行われている。一部の者は、「彼は預言者である。ディーヴと戦って死んでしまったのだ」と言う。[一方] キリスト教徒は「彼は神の息子だ」と言う。

<[中国にある] 墓>

中国の領域のある町に巨大な墓がある。墓の中にはヤシの木のような男がいる。足で立ち、両手が体幹(bun)から垂れ下がっている。体にはたくさんの毛が生えている。手で男の腹を叩くと、太鼓の音がする。それが誰なのか誰も知らない。

<[中国にある別の] 墓>

同様に、この[中国の] 地方で墓が見つかった。頭蓋骨は大きなドームほどもあり、外周は20アラシュである。[頭骨の] まわりには黄金の首飾りがかけられている。その真上にはイーワーンが設けられ、鏡がかけられている。祭日には門が開かれてその頭蓋骨を見ることができる。[すると] ある者が言う。「被造物をかように創造し、かように滅ぼす神を畏れなさい」と。[参拝者たちは] その頭蓋骨に酒を満たし、飲む。その後、元に戻し、翌年の祭日まで[納めておく]。

<巨大な墓>

東方の王が自分の国で墓を発見した。中に[巨大な] 1つの遺体があった。[王は] その者の2本の歯を2頭のラクダに乗せてカリフのもとへ送った。カリフは手紙を書いた。いわく、「おお不信心者よ。被造物をかように創造し、滅ぼされる神の力を畏れよ。」

<[ベルベルにある] 墓>

ベルベルの境域に屋根のある正方形の館がある。その中にはある人物が横たえられているが、ま

50) 偽カリステネスによれば、プトレマイオスがアレクサンドリアに遺体を運び「アレクサンドロスの遺体」と呼ばれる墳墓を築いたとされる [伝カリステネス『アレクサンドロス大王物語』、204頁]。

るで木のようにあり、両手はそれぞれ幹のようである。手を頭の上に置いている。熱が出たときその館へ来ると、すぐに熱が下がる。疫病の生じた部族がその墓の土を持って帰ると、疫病は治まる。それが誰なのか誰も知らない。

(p.354) <[イエメンにある] 墓>

イエメンで墓が見つかった。中には1人の人物が眠り、指には、人間の頭にすっぽりととはまるくらい大きな指輪 [がはめられていた]。その指輪はウマル・[ブン・] アル=ハッターブのもとへ送られた。[ウマルは] これを目にすると涙を流した。「どうして泣くのですか」と [人々が] 尋ねると、[ウマルは] 言った。「我が身を嘆いているのだ。指が我々の [首] よりも大きな種族がいたというのに、死が彼らを制してしまった。彼らがこの世から何を得ることができたのか、私にはわからない。」

教友たちはみなウマルと一緒に泣いた。

<巨大な墓>

ムアーウィヤの治世に1人の人物が見つかった。岩の上に横たわり、背丈は28アラシュであった。カアブ・アル=アフバルに「これは誰か?」と [人々が] 尋ねると、彼は言った。「彼の名はわかりません。ですが、彼の見当について述べましょう。創造主——至大なれ、崇高なれ——は『朽ちたナツメヤシの木のように』 [Q69: 7] とおっしゃっています。つまりアードの民⁵¹⁾ はみな、ヤシの木のように倒れてしまったのです。」

ムアーウィヤは命じて、人々がそれから訓戒を得られるよう墓を造った。

<[ビルキースの] 墓>

タドゥムル (パルミラ) の町で [建物の] 土台が掘り起こされていた。[すると] 1枚の黄金の銘版が見つかった。そこには「これは善良なるビルキースの墓である」と書かれていた。

スライマーンの統治から13年が過ぎたアーシューラーの日⁵²⁾ に、彼女はスライマーンに帰依した。[14] 年にスライマーンの妻となり、スライマーンの治世21年目のラビーウ・アル=アッワル月 (第3月) の月曜日にこの世から旅立った。[スライマーンは] 命じて夜に彼女をタドゥムルの町の城壁の下に埋葬した。[その場所は] ジンも人も知らなかった。

アブドゥルマリク・ブン・マルワーンの時代にそこが掘り起こされたところ、サフランのように黄色いガラスでできた棺が見つかった。彼女はまさしくその中に横たわっていた。アブドゥルマリクに宛てて手紙が書かれた。彼は次のような返答をした。「元の同じ場所に埋めよ。この地方のハラージュ税はその [墓の] ドームを建造する費用に充てよ。」

そこで、大理石と巨石でもってその上にドームが建造された。

<[ナジュラーンにある] 墓>

ウマル・ブン・アル=ハッターブの治世にナジュラーン⁵³⁾ に1人の役人が派遣された。彼は次

51) ヌーフの民の次に栄えた伝説上の民。預言者フードの警告に耳を貸さなかったために、暴風雨で滅ぼされた [「アードの民」『岩波イスラーム辞典』]。

52) アーシューラーは、ヒジュラ暦でムハッラム月 (第1月) 10日のこと。

53) 北イエメンの都市。本訳注 (5)、注 26、369 頁参照。

のような手紙を書いた。「人が井戸を掘っておりました。その井戸の中で1人の人物が見つかりました。両手を頭の上に置いています。手を頭から離れたところ、血が流れ出しました。いかがいたしましょう?」

ウマルは次のように返答した。(p.355)「これは次のような謂れの男だ。イエメンの王アブー・ザルア (Abū Zar‘a)⁵⁴⁾ はナジュラーンを攻撃し、破壊して火を放った。彼はアブドゥッラー・ブン・サーミル (‘Abd Allāh b. Tāmīr) を捕らえ、ユダヤ教への改宗を求めた。[アブドゥッラーは] 承諾しなかった。[アブー・ザルアは] 彼の頭に柱(杭)を打ちつけて殺した。それから命じて彼を井戸に放り込み、[井戸を] 埋めた。2万人をこのようなやり方で火あぶりにし、福音書を焚書にした。その後、イエメンへ帰った。これこそは、至高なるアッラーが『坑の住人⁵⁵⁾ は滅ぼされた』[Q85:22] とおっしゃったことである。」

その地は参詣地とされた。

<[ウワールにある] 墓>

「ウワール (Uwāl)⁵⁶⁾ の島に高く切り立った山がある。いかなる方向からもその山の頂上にたどり着くことはできないが、そこにはホスロウの墓がある。そこへ行くものは何かしらを山に投げる。さもなければ沈んでしまう。そこへは誰も行くことができない。この島は「[潜水夫] の島 (Jazīra-yi [gawwās])」と呼ばれる。

<[ウッド・ブン・ウダドの] 墓>

太陽の昇る場所に山が1つある。イスカンダルがここに到達したとき、立派な館を目にした。その中には大きな壺がいくつも置かれており、赤い硫黄で満杯になっていた。黄金の玉座があり、その上に人が横たえられていた。金の燭台が置かれ、錦織りの衣がその人物にかけられ、上からはルビーの房が垂れ下がっていた。イスカンダルは下りて黄金の銘版を見た。そこにはシリア語で次のように書かれていた。「この王はウッド・ブン・ウダド (Udd b. Udad)⁵⁷⁾ である。1000の齢を生き、1000の処女を娶り、1000の息子を持ち、1000の財宝を貯えた。[しかし] 死が訪れたとき、これらはまったく役に立たなかった。世界が終わるとき、これらの財宝はアラブ人のムハンマド(預言者ムハンマド)——彼に平安あれ——のウンマ(共同体)に引き渡される。」

[イスカンダルは] そこから引き返した。

<墓>

信頼できるある人物から私が聞いた話である。その人物は、ルームの方から1年の道のりを旅してきた。彼は語った。「私はとある地方のとある山へ到着しました。その山の下には [洞窟]⁵⁸⁾ が

54) 『クルアーン』において、星座章(85章)に加えて象章(105章)などに登場する、ヒムヤル最後の王ズー・ヌワース (Yūsuf Aš‘ar Dū Nuwās) のことであろう。本文中にある、彼のナジュラーン虐殺については、ベツ・アルシャムの司教であったシメオンの手紙から、ユダヤ教に改宗したズー・ヌワースがナジュラーンでキリスト教徒を虐殺した出来事は、西暦524年に起こったことが明らかとなっている [EP: Dhū Nuwās]。

55) 本書の「ナバティア」の項(本訳注(5)、469頁)で坑の住人が登場する。

56) 『諸都市辞典』によると、バフライン地方の島の名で、多くの庭園があり、ナツメヤシとレモンの名産地とされる [Yāqūt, Mu‘jam al-buldān, vol. 1, p. 274]。

57) イブラーヒーム(アブラハム)に連なるムハンマドの祖先に、ウッド(もしくはウダド)の名がある [イブン・イスハーク著、後藤明他訳『預言者ムハンマド伝』岩波書店、2010年、第1巻4頁]。

58) 原典では BADAFT となっているが、前注18に挙げたように、この語の意味は不明なので La 写本にある「洞窟」と採る。

あり、そこに入っていくと、12人の男が輪になって立っているのが見えました。輪の外側には台があり、1人の女がその上に横になり、(p.356) 子供を胸に抱いていました。その地方の人々は、『彼らがこのように立ち、この女とこの子供がこのように眠って数千年になる。彼らは朽ちもしなければ、倒れもしない』と言っていました。人々は参詣に訪れていました。彼らの衣服が朽ちると、彼らのうちの誰かしらが衣服を繕い、その頭を手巾で包みます。いかなる猛獣も家畜もそこには行こうとしません。

その境域で王が逝去しました。彼はその洞窟の中に埋めるよう遺言しており、[そこに]埋葬されました。翌日見てみると、王の遺体は外に投げ出され、損壊していました。[別の]ある王がそこに門扉を築き、砦を造ろうとしましたが、いかに建てようとも、一晩ですべて崩れ落ちてしまうのでした。私は、この集団が何者なのかよくよく尋ねたのですが、誰も教えてくれませんでした。彼らの事情に関しては誰も知らなかったのです。」

その地方ではくしゃみを不吉とみなしている。くしゃみが出そうなときに仕事であれば、[仕事を]放棄する。

<[シャッタードの]墓>

ハドラマウトで1つの墓が見つかった。石を削った館があり、中には黄金の玉座が2つあった。一方には巨大なアードの民が眠っており、彼の頭上には1枚の銘版が置かれていた。そこには次のように書かれていた。「私を教訓とせよ。永遠の命に惑わされる者よ。私は、高樓の城の主シャッタード・ブン・アード⁵⁹⁾である。」

<逸話>

知れ。マームーンがカリフ位に就いたとき、彼は学識者や法学者たちを召し出し、世界の驚異について尋ねた。1人の学ある者が言った。「公正なるヌーシラヴァーンがマダーインにイーワーンを造りました⁶⁰⁾。誰も破壊することができないほどのものです。」

マームーンはひと目見ようとそこに出かけていった。驚いて、「このイーワーンは誰が造ったのか」と老人に尋ねた。[老人は]言った。「ヌーシラヴァーンだ。しかも私は、彼の墓がどこにあるのか知っておる。」

老人は険しい道を通り、彼を連れて山に登っていった。その高さは5ファルサングもあり、頂上に洞窟があった。その中には館と黄金の玉座があった。ヌーシラヴァーンはその上に横たえられていた。頭には王冠を、手には腕輪をつけ、腐らないように体中に薬が塗られていた。マームーンは彼を見ると、泣き出した。(p.357) 彼の耳の脇の髪は白く、錦織りの頭巾が額に巻かれ、そこには次のように書かれていた。「この世は誰の上にも留まらない。世界は神が創ったのであり、私が努力して創ったのではない。もし人生が一度きりでなければ、私にはどのような望みがあるか。世界が永遠でなければ、私にはどのような安らぎがあるか。」

さらに [マームーンは] 指輪を見た。それには次のように書かれていた。「想像してみよ。世界中がおまえのものになっても、[この世から] 去る時が来たら何になろう。すべては無になるのだから。私が死んだ後に、さる王がここへやってくるだろう。その者には不屈き者がおり、このドームの中で裏切りを働くだろう。」

59) エラム(イラム)の宮殿を建てたとされるシャッタードについては、本訳注(5)、383-384頁を参照のこと。

60) イラクのマダーインにある「ホスロウのイーワーン」については、本訳注(5)、486-487頁参照。

マームーンは外に出て調べた。すると1人の従僕が指輪を盗み取っていた。彼からそれを取り返すと、指輪には次のように書かれていた。「財なき者には成功なし。妻なき者には家督なし。子のなき者には喜びなし。この3つのなき者にはいかなる悲しみもなし。」

<逸話>

知れ。イスカンドルが西の地方に至ったとき、「闇の世界」の境域にラピスラズリの山を見た。山頂にはトパーズでできた館があり、その中には水の湧き出る泉があった。アーチには宝石があしらわれ、光が水に反射して館が照らし出されていた。泉の上に黄金の玉座があり、その上には何者かが横たえられていた。体は人間の体のようにあり、頭は猪の頭のようにだった。樟脳の敷物の上にあり、体の上には銀糸織りのペールがかけられていた。彼の近くに行った者はみな死んでしまった。

すると、その泉から声が聞こえてきた。「イスカンドルは世界中を廻ってきた。そして誰も見たことのないような多くのものを見てきた。今や死ぬ時と心得よ。」

イスカンドルはこれを聞くと、「私は死の報せを聞いた」と言って引き返し、学識者らにその死者の素性を尋ねた。だが、それが誰なのか、また彼に近づく者がなぜ死んでしまうのか、誰も知らなかった。イスカンドルはイラクに至り、この世から去った。アッラーが彼を憐れまんことを。

<[ハッサーン・アル＝カイルの] 墓>

カルビー⁶¹⁾は言う。

サヌアーの人々が穴を掘っていると、堅固な長廊下が見つかった。(p. 358) そこには玉座が置かれており、その上には背丈が12アラシュもの人があった。手には黄金の角を持ち、頭には紅いルビーがあしらわれていた。彼の頭上には黄金の銘版があり、そこには次のように書かれていた。「私はハッサーン・アル＝カイル (Hassān al-Qayl)⁶²⁾。王権は神のものである。時が私を滅ぼした。何であれジャルヒード (JRHYD) には誉れがあったにせよ、ジャルヒードは1万2000人の帝王であり、私はその最後の者であった。私はズー・シャアバイン (Dū Ša'bayn) [という山]⁶³⁾を要塞にし、死から私を守ってくれるようにした。[だが] ある夜、この砦で眠りに落ちると、死が私を捕らえた。この砦は私の牢獄となり、私の墓となった。」

[死者からの教訓]

ある城の扉には、次のように書かれていた。「何と多くの王がこの城を継ぎ、そして死んでいったことか。永遠に相続しうる者は、かの王(神)しかいない」と。[ペルシア語の]意味は、「何と多くの王がいたことか。彼らはこの城を引き継いで死んでいった。永遠なるものは神のみである。」

また別の城には、「何と多くの地上の町々が空になったことか。町は荒れ果て、その建設者は死

61) 本訳注(2)、注90、433頁参照。

62) 「カイル」はイスラーム以前のイエメンの王の称号である [EP: Kayl]。この碑文については『冠の書』によく似た内容のものが記録されており、埋葬されていた人物の名前はハッサーン・ブン・アムル・アル＝カイル (Hassān b. 'Amr al-Qayl) となっている [al-Hamdānī, *Kitāb al-iklīl*, vol. 8, pp. 199–200]。ヒムヤル王国最後の王ズー・ヌワースの兄、ハッサーン・ブン・アビー・カリブ・ティバーン・アスアドの孫のことか [イブン・イスハーク『預言者ムハンマド伝』(後藤他訳)、第1巻16–29頁; al-Hamdānī, *Kitāb al-iklīl*, vol. 2, p. 82]。なお、『冠の書』ではJRHYDという単語は見られず、この語が意味するものは明らかではない。

63) テキストはDū Ša'BTYNYであるが、シャアバインと読み替える。イエメンにある山の名前とされる [LN: Dū Ša'bayn; al-Hamdānī, *Kitāb al-iklīl*, vol. 2, p. 54]。

を味わった」と書かれている。つまり「ペルシア語では」、「何とも多くの地上の町が空っぽのまま残され、荒れ果て、それを建設した者は死を味わった」という意味である。

また別の城には、「時の移ろいが彼らを襲い、彼らは墓に入った。そして影も形もない」と書かれており、さらに別の城には次のように書かれている。「これを建てた者は死に、彼が建てたものは残っている。汝はその中にアッラーによる訓戒を見ぬか。時の儂さに気づかぬ者よ。町々を建設した者がいたところはいずれも、彼亡き後、今日では荒地だけがあらわとなっている。日々の移ろいが打ち破れた場所へと彼らを投げ捨てた。彼らは一時とて、地上の飾りとはならなかった。」

この章はここまでで十分であろう。私は数々の書物から得たことを選んで引用した。その真偽については保留する。私はこれらの話を教訓として述べてきた。そうすれば、王たちの末路がいかなるものであったかを知ることができよう。次の章では、隠された宝とその行く末について述べていこう。

〔第5章〕 もろもろの財宝について

知れ。記録された驚くべき財宝のうち最初のものは、イラムの主、シャッタード・ブン・アードの財宝である。(p.359) [それについては] 城の章で記される⁶⁴⁾。その次はカールーン(コラ)(Qārūn)⁶⁵⁾の財宝である。彼は、ムーサー——彼に平安あれ——のおじであり、荷を満載した400頭のラクダをその軛(鍵)の下に従えたほどの財宝を集めた。至高なるお方のいわく、「その(宝庫の)鍵は、数人の力の強い男たちにとっても重かった」[Q28: 76]。次いで、ザッハーク⁶⁶⁾の財宝がその多さにおいて記録されている。

＜ザッハークの財宝＞

知れ。ザッハークは世界中の人々の財産を取り上げた。指輪や首飾りを彼に取り上げられたことのない女や娘はひとりもないほどであった。彼はある日、書物の中に、「彼の宝はすべてごろつきや貧者の糧となるだろう」と書かれているのを見た。そのため、自分の銀や財宝をかき集め、銅製の甕を4つ作り、そのすべてを黄金で満たし、誰も知らない荒野の中、とある山のふもとに人知れず埋めた。その後、バービル(バビロン)に戻り⁶⁷⁾、7つの町にいたあらゆる乞食をすべて追い出した。彼らは留まる場所を探して荒野をさまよい歩いた。くだんの山のふもとに至り、彼らはそこに落ち着いた。彼らの中に1人の老人がいた。彼は大きな石を見つけた。その石の上には鳥のかぎ爪が付いていた。彼は言った。「おい、みなの人。私は宝を見つけたぞ。」

64) シャッタード・ブン・アードとイラムについては、第4部第3章(本訳注(5)、383-384頁)を参照。ここでは「述べられるだろう(bi-āyad)」という仮説法になっているが、本書の構成上、町について述べた第4部第3章はこの部分に先行している。

65) 旧約聖書『民数記』に登場する。モーセ(ムーサー)に反逆し、神に滅ぼされた。『クルアーン』の29章や40章では、神に背き滅ぼされた人々として、アードの民とともに挙げられている。ここでの一文は、『クルアーン』28章76節「さてカールーンは、ムーサーの民の一人であったが、かれらに対し横柄な態度をとるようになった。われは(夥しい)財宝をかれに与えたが、その(宝庫の)鍵は、数人の力の強い男たちにとっても重かった」に基づいている。なお、後世カールーンは錬金術によって莫大な富を手に入れたと考えられ、錬金術の創始者とみなされるようになった[EP: Kārūn]。

66) イランの伝説上の暴君。本訳注(2)、420頁に既出。

67) ザッハークがバービルを建設したことについては、本訳注(5)、389頁で簡単に触れられている。

彼らは言った。「どうやってだ？」

[老人は] 言った。「あの石の上に、鳥のかぎ爪が付けられている。かぎ爪を [ひっくり返せば]、宝があるはずだ。みなの人、石が持ち上がらないか手助けをしてくれ。」

彼らはその石を裏返すと、財宝が現れた。そして、黄金で満たされたあの4つの甕はこの貧者たちの分け前となった。彼らは [宝を] 持ち去り、全員が大金持ちになった。

<カイ・ホスロウの財宝>

世界中の財宝は、カイ・ホスロウが保有した。というのも、「世界を映す盃」が彼の手中にあったからである⁶⁸⁾。その経緯は次のとおりである。

ある男が荒野に留まっていた。夜になり、[世界を取り巻く] 周海から、山ほどもある黒い動物が現れた。それは口の中に、縦横が1アラシュもの大きさのスピネルをくわえていた⁶⁹⁾。スピネルを置くと、荒野は明るくなった。[その動物は] 草を食み、しばらくすると再び [スピネルを] くわえ、水に潜っていった。この男は言った。「こいつからスピネルを取り上げるには、どうすれば良からうか？」

男は赤土を持ってきてそれをこね、夜になるまで石の陰に隠れた。(p.360) [夜になり] くだんの生き物がスピネルを持ってきて置き、荒野で草を食み始めた。男はこねた土を手に取り、スピネルめがけて投げつけた。[すると] 荒野は暗くなり、かの動物は水の中に潜っていった。男はスピネルを手にし、カイ・ホスロウのもとに持っていった。カイ・ホスロウがスピネルの中をのぞき込むと、世界中の7つの気候帯が [すべて] 見えた。そして、王たちや、彼らの宮廷や軍勢、バーザール、人々がどこに向かっているか、またどこからやって来るか、そして財宝の蔵をどこに隠したかを知った。[スピネルの] ある面では夜が見え、別の面では昼が見えた。王たちの家財や、彼らの財宝の在り処、珍品や財産について知るようになると、カイ・ホスロウは直ちに [そこに] 向かい [財宝を] 手に入れた。こうして世界中の宝庫が彼のものになった。そのため、この盃は「世界を映す盃」と呼ばれたのである。

ある者は、「この盃は天から降ってきて、ある男の馬のたてがみに落ちたのだが、男がそれをカイ・ホスロウに与えたのだ」と言う。また、「カイ・ホスロウはスライマーンである」とも言われている。あるいは、「カイ・ホスロウはムーサーであり、アフラースィヤーブはファラオである」と言う者もある。なぜならカイ・ホスロウはアフラースィヤーブを水中で滅ぼし、ムーサーもファラオを水中で滅ぼしたからである。だが、カイ・ホスロウがどこで死んだかを誰も知らないように、ムーサーがどこで死んだか、誰も知らない。カイ・ホスロウの財宝は、双角の所有者の手にわたった。

<逸話>

[財宝がイスカンダルの手に入った] 経緯は次のとおりである。あるみすぼらしい男がイスカンダルの宮廷にやってきた。彼は毎日 50 ディナーを渡し、「私を守ってください」と言った。しばらくして男は死んだ。イスカンダルは彼を呼びだそうとしたが、人々は「彼は死にました」と言った。[イスカンダルは] ひとりで彼の家を訪れ、尋ねた。「この男は一体全体何を持っていたのか？」

68) カイ・ホスロウが「世界を映す盃」を所有していたことは、「シーズの海」の項(本訳注(4)、491-492頁)でも触れられている。

69) 「スピネルの石」の項(本訳注(4)、542頁)において、「水の牛」がもたらす輝くスピネルを、赤土を用いて奪う話が見える。

人々は答えた。「ロバを1頭持っていました。」

[イスカンダルは] 言った。「彼は何をしていたのか？」

人々は答えた。「彼は毎日このロバに乗って荒野に行き、戻ってきました。」

イスカンダルはそのロバを手に入れ、それに乗って好きに歩かせた。ロバはある山のふもとに行き、立ち止まった。[そこには] 男の姿が描かれた石があった。その人物は片手に「[アラビア文字の] ラーム(lām)」の形をした曲がった枝を持ち、別の手には鐘を持っていた。双角の所有者は言った。「この2つ [の単語] を [ひっくり返すと]、ラーム(lām)は財産(māl)に、鐘(zang)は(p.361) 財宝(kanz)になるぞ。」

その場所を探索すると、長廊下が現れた。その中には石の宮殿があり、金や宝石でいっぱいの多くの建物があった。大きな錠前がかけられた別の建物を見つけると、イスカンダルは言った。「この建物の中にあるのは、ものすごい宝に違いない。」

錠前を開けると、中は空っぽで土埃が積もっているだけであった。彼はその館の中を歩き回り、[目薬用の] 小瓶(mikhāla)を1つ見つけた。それはアーチの上に置かれ、エメラルドのさぐり針が入っていた。[イスカンダルは] それを手にとった。彼のワズィール(宰相)は言った。「おお、王よ。一度 [それを] 私の目につけてください。もし災いがあるなら、あなたではなく、私に降りかかりますように。」

イスカンダルは言った。「これらの宝はおまえに与えよう。私はこの小瓶で十分だ。」

そしてイスカンダルはさぐり針を自分の目に当てた。彼の目に光が生じ、世界中にあるすべての財宝が見えた。彼はたくさんの財宝を集めたが、それは金と銀の山塊2つを常に携えたほどであった⁷⁰。彼は全世界を征服し、カーフの山の端から反対の端までを巡った。

<[イスカンダリーヤ]の財宝>

知れ。この世にはさまざまな財宝が数多くあったが、すべては誰か別の者たちの相続品となり、[さらに] 多くが土の下に残されたままとなった。創造主がそのことを誰かにお知らせにならない限り、誰もその秘密に到達する道を見つけることはできない。

次のように言われている。ある誠実な男が「イスカンダリーヤの灯台の下に財宝がある。それはおまえのものとなる」という夢を見た。男は言った。「灯台は水中に立っている。水の中の財宝をどうやって私が得ることができようか？」

幾度かこの夢を見たので、[男はついに] 小舟に乗ってその灯台を目指した。灯台の周辺を廻っていると、塔から1羽の鳥が飛び立ち、銀文字の書き付けが落ちてきた。男はそれを拾った。そこには、「心配事を抱く者は誰であれ、あごひげを根元から櫛で梳くと、心から心配事が取り除かれる」と書かれていた。男はそれを読むと、怒ってその書き付けを投げ捨て、引き返した。彼は言った。「あの夢は、私にこれほどまでの骨折りをさせるためにディーヴが見せたに違いない。」

男は荒野に至り、ある山のふもとで疲れ果てて座り込んだ。櫛を取り出し、あごひげを梳いた。頭を上に向けると、山の上で何かが光輝いているのが見えた。[それをよく] 見ようと彼は登っていった。[すると] 脇に、黄金の臼(lihīda)があった。大水によって泥が洗い流されていたのである。その上を(p.362)きれいにすると、黄金の馬蹄がいっぱいに詰まっていた。そのすべてを飼葉袋に入れて家に持ち帰り、大金持ちになった。夢と偉大な者たちの書き記したものは軽視しては

70) イスカンダルとともに自ら動く金銀2つの山塊については、本訳注(4)、526頁参照。

ならないと、身をもって体験したのであった。この逸話は本書の冒頭ですでに述べられている⁷¹⁾。

<別の財宝>

次のように言われている。ある貧しい男に妻がいて、「ザフマン(Zahman)」という名の家を持っていた。彼は、「ダマスクスで財宝を見つける」という夢を見た。この男は信じなかったが、何度も夢に見た。貧しかったので、ダマスクスに行き、町中をうろついたがどうすることもできなかった。ある男が「どこから来たのか」と話しかけてきた。彼は「レイからだ」と答えた。

男は「何をしにきたのか」と聞いた。

彼は答えた。「愚かにもまた不幸にも、ダマスクスで財宝を見つけるだろうという夢を見たからだ。」

その男は笑って言った。「私は、レイに『ザフマン』と呼ばれる家があり、その家に財宝がある、と言う夢を見続けて何年にもなる。私は夢を信じはしなかったが、あなたは純朴な御仁だ。」

レイ出身の男はこれを聞くと引き返し、自分の家に入った。地面を掘り返していると、30マンの黄金の挽き臼が見つかり、それで大金持ちになった⁷²⁾。

<別の財宝>

次のように言われている。ヒンドの人サルバージュ(SRBAJ)は、ある王のために黄金のサソリを1年がかりで作り、巨額の銀を手に入れた。王の御前に持って行って置くと、[サソリは]立って動き回り、そしてある場所に着くと立ち止まり、頭から土に潜っていった。サルバージュは「この場所を掘り起こしなさい」と言った。人々が掘り起こすと、2個の黄金の樽が見つかった。それらは金と銀でいっぱいであり、その上に1匹の蛇が眠っていた。蛇を殺し、財宝を宝庫に送った。サルバージュが言うには、「この黄金のサソリは私がまじないで作ったものだ。黄金は黄金を目指し、類は友を呼ぶ。サソリはしばしば蛇の巣穴を棲み処とする」と。

この話は、誰もが簡単に財宝を見つける訳ではないことを示すために述べたのであり、話の信憑性については保留する。私は[書物から]得たことを引用したまでである。

<カールーンの財宝>

知れ。カールーンが得た財宝は、錬金術の知識によるものであった。(p.363) 彼はムーサー——彼に平安あれ——から教わり、宝庫のいくつもの鍵を何頭ものラクダで運ばせた。ムーサーは彼に言った。「20 ディーナールにつき半ディナールを喜捨として与えなさい。」

[カールーンは] 払わなかった。そこで [ムーサーは] 「100 ディーナールにつき1 ディーナールを」と言った。[カールーンは] 「無理だ」と言った。そこで [ムーサーは] 「1000 ディーナールにつき1 ディーナールを」と言った。

[カールーンは] 言った。「[支払って] 何になると言うのか。」

[ムーサーは] 答えた。「私はこの世の恩恵をあなたに与えました。来世の恩恵もまた、あなたに与えようと思つてのことです。」

71) 本訳注(1)、214頁に既出。

72) この逸話は、「橋の上の宝の夢」系の説話である。同系統の逸話のアラビア語での最古の例は、10世紀のタヌーヒーによる『悲しみの後の喜び』に見られるという[杉田英明「橋の上の宝の夢」『葡萄樹の見える回廊』岩波書店、2002年、259-317頁]。この系統の物語は十字軍の影響でヨーロッパに伝わり、さらに大正時代の日本でも翻案され、高山の民話と誤認されて流布した[竹原威慈「グリムの伝説と民間伝承の東西交渉：『橋の上の宝の夢』と『味噌買ひ橋』(AT1645)を巡って」『グリム童話と近代メルヘン』三弥井書店、2007年、145-189頁]。

[カールーンは] 1000 ディーナールにつき1 ディーナールを払うとして勘定したところ、40頭のロバで運ぶほどになったため、惜しんで差し出さなかった⁷³⁾。至高なるアッラーはムーサーに、「われはしかじかの日に、カールーンを財宝ともども大地に沈めよう」と啓示した。[ムーサーはカールーンに] 伝えた。[しかし] カールーンは大皿を金で満たし、ある女に与えて言った。「集会の際に『ムーサーは私と姦通しました』と言え。」

その女は金を受け取り、集会に現れ、言った。「人々よ、この世界の後には次の世界があります。カールーンは大皿の黄金を[私に] 与え、『ムーサーを中傷せよ』と言いました。」

ムーサーは悲しみ、大地に対して「彼を沈めよ」と言った。[カールーンは] 彼の数々の財宝や宮殿や一族郎党もろとも大地に沈んでしまった。至高なるお方のいわく、「それからわれは、彼とその屋敷を地の中に埋めてしまった」[Q28: 81]。

<ジュバイル・アル＝ムータフィキー⁷⁴⁾の財宝>

ジュバイル・アル＝ムータフィキーの財宝の由来は次のとおりである。マグリブの荒野で銅製の棺が見つかった。彼は、「この中には遺体があるのではなかろうか」と言って、それを開けた。中には別の銀製の棺があり、さらにその中には黄金の棺があった。それを開けると、中から紅いルビーでできた[目薬用の]小瓶がでてきた。そのさぐり針はカンラン石であった。何人かの自身のグラーム(男奴隷)たちの目につけると、彼らは数々の財宝や宝石の鉱山がどこにあるかが見えるようになった。それらの財宝や宝石でもって、彼はイスカンダリーヤを築いた⁷⁵⁾。黄金の列柱を建て、驚異的な数々のものを生み出した。

[当初は] 彼が何かを建てると、その基盤は地中に沈んでいった。100年のあいだはずっとこのようであった。やがて妖精の娘が海から現れ、まじないを用いてイスカンダリーヤに現存する諸像を作った。結果、建物の基盤は確固たるものとなった。ジュバイル・アル＝ムータフィキーは500年間生きて統治し、イスカンダリーヤのためにそれらの財宝を費やした。

<アンダルス⁷⁶⁾の財宝>

ターリク・ブン・ズィヤードはアンダルスを征服した。彼はそこでスライマーン (p. 364) —— 彼に平安あれ —— の食卓を見つけた。誰も目にしたことのないほどの宝石がそれにちりばめられていた。ラビーウ・ブン・ザイド (Rabī' b. Zayd)⁷⁶⁾ は「一部の宝石の価値は、100万ディナール以上もあった」と語っている。別の館に入ると、24個の冠が置かれていた。各々の冠には、カイ・ホスロウ、アフラスィヤブ、スィヤーク・ヴァシユ、パフラーム・チュービーン、カイ・カーウース、ジャムシード、イスカンダル、ダーラー・ブン・ダーラー、パシヤング・ブン・アフラスィヤブ

73) 以下の話はタバリーの史書に見られる [al-Ṭabarī, *Tārīḥ*, vol. 1, p. 227]。

74) 本書第4部第3章で、この人物はアフラーム(ピラミッド)を建造した人物として描かれている [本訳註(5)、384-385頁]。

75) 本書第4部第3章の「イスカンダリーヤ」の項では、ジュバイル・アル＝ムータフィキーは登場しない [本訳註(5)、381-382頁]。本書より後の時代のヤーカートは、イスカンダリーヤの項において、ジュバイル・アル＝ムータフィキーや、目に付けると財宝の在り処がわかる薬が入った小瓶についての同様の話を伝えている [Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 1, pp. 183-184]。

76) 校訂本では「ラビーア (Rabī'a)」となっているが、訂正した。ラビーウ・ブン・ザイドはモサラベ(アンダルスのアラブ化したキリスト教徒)の歴史家であり、ラテン名はレケムンドゥス (Recemundus) である。後ウマイヤ朝のアブドゥッラフマーン3世(在位912-961年)とハカム2世(在位961-976年)に仕え、通称『コルドバ歳時記』の作成に関与した [EP: Rabī' b. Zayd]。

(Pašang b. Afrāsiyāb)⁷⁷⁾、タフムーラス、ギーヴ (Gīw)⁷⁸⁾ といった王の名前が書かれていた⁷⁹⁾。

<ルームの財宝>

ルームの財宝は、その豊富さゆえに記録される。ウマーラ・アル＝タイヤーフ (‘Umāra al-Tayyāh)⁸⁰⁾ がルームの王のもとに使者としてやって来た。彼は、ルームの王のワズィール (宰相) の前で、[カリフの] ジャアファル・アル＝マンスールが所有する財宝について説明した。[ワズィールは] 彼をルームの王の御前に連れていった。[ウマーラはそこで] 飾り立てられた基壇 (šuffa) を目にした。王は基壇の一番奥に座っており、その基壇があまりにも巨大なため、スズメほどに小さく見えた。

[ウマーラは] 伝える。「私は、基壇の3分の1だけ前に進んだ。すると緑の雲が現れ、私を中に取り込んだ。私は恐ろしくなってしまった。私が基壇の半ばに達すると、[今度は] 赤い雲が現れて、目が眩んでしまった。私は座り込み、[雲が] 晴れると、先を進んでいった。私は [王に] 挨拶をし、先ほどの2つの雲について尋ねた。『おまえに見せてやろう』と王は言い、絨毯の下に手を入れ、盾ほどもある紅いルビーを取り出した。それを太陽にかざすと、赤い雲が出現した。そして、[紅いルビーを] 納めると、今度は緑のエメラルドを取り出した。太陽にかざすと、その [石の] 光で緑の雲が生じた。その後、王は私を巨大な城に連れていった。そこには封印された建物がたくさんあった。彼は、ある建物を開いた。[中には] 積み重なったいくつもの袋が見えた。王は私に『1つ持ちなさい』と言った。私は1つ取った。その後、王は壺でいっぱいになった建物に入り、私に『1つ持ちなさい』と言った。私は1つ取った。その後、私たちは外に出て、ある建物の中に入った。彼はふいごと1マンの銅を求め、[銅を] 鎔かした。そして、例の袋から少量のものを鎔かし、銅の上にのせると、[銅は] 純金になった。さらに、1マンの鉛を鎔かし、例の壺から少量のものを [鉛の] 上にのせると、[鉛は] 純銀になった。王は、『戻って信徒の長に知らせよ。余にはこのような錬金術がある、と。そして、オリーブの自生する境からコンスタンティノーブルの境までを占めるほどの軍隊を余は持っているのだ、と。』」

(p.365) ウマーラはマンスールのもとに戻り、この話をした。彼は錬金術の知識の習得に大いに努力したが、習得することはできなかった。

<ダーウード——彼に平安あれ——の財宝>

知れ。ダーウード——彼に平安あれ——は、帝王として統治し、使徒であり、預言者であり、王であった。世界は彼の支配下にあった。彼は1万2000人の衛兵を有していた。彼が現世から旅立ったとき、彼には錠のかけられた宝庫が1つだけあった。そこには、「この建物の中には天から下った財宝がある」と書かれていた。その後、スライマーン——彼に平安あれ——がその扉を開け

77) ここではアフラーシヤーフの息子がバシャングとして挙がっているが、フェルドゥスィーの『王の書』など一般的には、バシャングはアフラーシヤーフの父として知られる。バシャング自身の父の名は、ロスタム、ザーニシュマニンなど諸説ある。一方、アフラーシヤーフの息子にはバシャングと言う名前の人物は存在しない。

78) カヤーン朝の第2代君主カイ・カーウースに仕えたグーダルズの息子。

79) ここに名前の挙がる王たちはいずれもビーシュグード朝やカヤーン朝といったイランの伝説上の王たちである。本書においては、イランやゾロアスター教などと、アンダルスやマグリブがともに関連づけて記されることが多く見られるが、この箇所はその最たる事例であろう。

80) 校訂本は非常に乱れているが、‘Umāra b. Ḥamza al-Kātib al-Tayyāh のこと (796/7 頃没)。隻眼であったが、書記・詩人としての才能に優れていたため、アッバース朝カリフのマンスールとマフディーから敬意を払われていたという [al-Šafādī, *Kitāb al-wāfi*, vol. 22, pp. 399–403]。なお、以下の逸話についてはイブン・ファキーフがほぼ同じ記述を残している。なお同書では、ここで「基壇」と訳出した語は「ホール (bahw)」となっている [Ibn al-Faḥḥ, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 137–139]。

た。中から黄金の箱が1つ見つかった。その中には1枚の書き付けがあり、そこには、「これらの問いに答えた者こそ、ダーウードの後継者なり」と書かれていた。読み進めると、次のように書かれていた。「物事のうち、最も少ないものは何か？物事のうち、最も多いものは何か？すべての物事のうちで最も苦いもの、また、最も甘いものは何か？すべての物事のうち、最も快いものは何か？すべての物事のうち、最も近いものは何か？物事のうち、最も遠いものは何か？物事のうち、最も良いものは何か？物事のうち、最も悪いものは何か？」

誰もが〔この問いに答えられずに〕戸惑った。

スライマーンは言った。「私がこれらの問いのすべてに答えてみせよう。」

人々が「言ってみよ」と言うと、〔スライマーンは〕次のように答えた。「最も少ないものは確信である。最も多いものは疑いである。最も苦いものは貧困である。最も甘いものは〔富裕〕である。最も快いものは肉体の中の魂である。最も近いものは来世である。最も遠いものは現世である。なんとすれば、〔現世は〕毎日人間から遠ざかっていくからである。最も良いものは気の合う友人である。最も悪いものはろくでもない妻である。」

スライマーン——彼に平安あれ——がこれらの問いに対して答えを出したので、後継者の地位は彼に委ねられ、王国は彼に与えられた。こうして彼はダーウードの地位を引き継いだ。

この〔話の〕意図は次のとおりである。先の数々の言葉は「財宝」と見なされてきたということである。財宝の中で最も良いものは「学識」である。財宝のために災難に見舞われることはあろうとも、知識のために見舞われることはないからである。

<パルヴィーズ王の財宝>

知れ。ホスロウ・パルヴィーズの財宝は、いずれもすべて知られている。彼が食べていた毎日の食事の1碗は、1万ディーナールの値であった。というのも、心臓を強くするために、1粒の真珠と1個のスピネルをすり潰してその食事に入れ、食べていたからである。

(p.366) 彼がそれらの財宝を獲得した理由は、彼が手に入れた1つの宝石にあった。その宝石は「宝石の王 (šāh-i gawharān)」と呼ばれていた。それを鎖につなぎ、海に沈め、引き上げると、あたかも鉄を引き寄せる磁石のように、あらゆる真珠や宝石や真珠貝が引き寄せられた。そうして〔パルヴィーズは〕あれほどの数の城砦を黄金や宝石で満たしたのである。ある日、1人の王が指輪を海に落とした。彼がパルヴィーズに不満を漏らすと、パルヴィーズは「宝石の王」を彼に送った。〔その王は「宝石の王」を〕水中に入れ、その指輪を引き上げた。

<風が運んだ財宝>

「風が運んだ財宝 (kanz-i bād-āward)」というのは、ホスロウ〔・パルヴィーズ〕の財宝の1つである。パルヴィーズがルームを征服し、ルームの王が逃走して財産や宝石や「救世主の木 (ḥašaba al-masīh)」を船に載せ、水上を進んで逃げようとしたちょうどそのとき、一陣の風が吹きつけ、船をホスロウの王国へと運んだ。それら〔の財宝〕は奪われ、すべてがホスロウのもとに運ばれた。〔そのため〕それらは「風が運んだ財宝」と名づけられた。

<牝牛の財宝>

牛の財宝は、〔次のような〕「牝牛の財宝 (kanz al-baqara)」の話として語られている。

それが発見されたのは、1人の未亡人の女にあった。彼女は娘を嫁がせ、錦をかけた1頭の牝牛

を娘の持参金として牽いていた。ホスロウの広場に来ると、[牝牛が] 立ち止まって糞をした。[牛は] 棒で叩かれても進もうとせず、眠ってしまった。ホスロウは[これを] 見て、「何か理由があるのだ」と言った。その場所を掘ってみると、宮殿の中庭が現れ、その周囲にはいくつもの館があった。ある建物の中には銀があり、別の建物の中には金の鏡があった。[鏡には] ハゲタカ、ヒョウ、象、ラクダ、鳥の姿が施されており、すべてが金でできていた。ルビーやさまざまな宝石も散りばめられていた。[ホスロウは] それらを持ち帰り、カヤーン家やサーサーン家の宝に加えた。それは「牝牛の財宝」と名づけられた。

<[手で握りつぶせるもの (mušt-afšār)⁸¹⁾>

ホスロウ王には、「手で握りつぶせるもの」があった。シトロンのようであり、金色で、伸び、液体のようであった。誰であれそれを手に取ると、黄金のように硬い固体となった。だがホスロウがつかむと柔らかくなり、彼の指の間を流れ、麝香の液がそこから滴るのであった。

(p.367) [また別の財宝として] 中国の王は、1枚の布きれを彼に送ったが、それは火の影響をまったく受けないものであった。

<イスカンダルの財宝>

イスカンダルの財宝については、「誰にも不可能だったものを彼は手に入れた」とよく言われる。

アブドゥッラー・アル＝マルワズィー (‘Abd Allāh al-Marwazī)⁸²⁾ のいわく、「ある晩、私は信徒の長マームーンの御前で書状を読んだ。それは、アリストテレスがイスカンダルに宛てて書いたものであった。そこでは次のように述べられていた。『あなたが町々を征服し、ヒンドウスターンにある館を開き、財宝を集めたことに、あなた自身が驚いている。あなたは人の為すことに驚嘆している。[そうであるのに] なぜ創造主の財宝に驚嘆の念を抱かないのか。「天と地の鍵」[Q39: 63] とあのお方はおっしゃっているではないか。[創造主は] 諸天を持ち上げ、月と太陽を巡らせたのだ。あなたは征服したこれらの町を、神のしもべともども丁重に扱われよ。あなたが集めたこれらの財産は、たった1枚の牛の皮だけであなたには十分なのだ』と。」

イスカンダルはアリストテレスの言葉の意味を理解し、すべての財宝を山岳地帯の山々に埋めた。そして、「山々は、宝石や鉱物が納められている創造主の宝物庫だ」と言い、牛の皮1枚をなめし、そこにすべての財宝の名を書き、[その皮を] ルームに持っていった。今日に至るまで、この皮は彼らの宝物庫の中にある。彼らは財宝を見たいと思ったらその皮を調べる。すると [財宝が] どこにあり、その埋めた場所にどのような目印があるか [わかるので]、人を送って手にするのである。

<逸話>

マームーンの時代にルームの王が人を送り、[彼に] 手紙を差し出した。そこには、「私の使者を

81) テキストにある al-MŠYMH については不明。サーデギー校訂本等に従い、読み替える。“mušt-afšār”とは、「蠟のように手で細工可能な柔らかい金の一種」であり、ホスロウ・バルヴィーズの宮廷の宝物庫にあったとされる伝説の宝である。原義はペルシア語で「拳で搾り出すもの」の意。アラビア語に入り、意味の不明瞭な語となったのだろう。なお黒柳氏は、zar-i mušt-afšār の訳語として、「やわらかな金(ホスロー・バルヴィーズ王の宝)」を充てている [黒柳恒男『新ペルシア語大辞典』大学書林、2002年、1658頁]。

82) ‘Abd Allāh b. Aḥmad b. Šabbūya al-Hāfiẓ al-Marwāzī (869/870年没)、あるいはアッパース朝第12代カリフ、ムスタイン (在位 862-866年) のワズィールを務めた ‘Abd Allāh b. Muḥammad b. Yazdād b. Suwayd al-Marwāzī (874/5年没) のことか [al-Šafādī, *Kitāb al-wāfi*, vol. 17, pp. 19, 494-495]。なお、前者については死去年以外に情報はない。また、両者ともマームーンとの関係は明らかではなく、確定することはできない。

大切にせよ。私が言ったものを彼が持ち帰ることができるよう、コヘスターンのニハーヴァンドの門まで軍を彼に同行させてくれ」と書かれていた。マームーンは一軍を彼とともに派遣した。[使者は]ニハーヴァンドの東門に到着すると、両側の門扉の真ん中を測り、20アラシュ掘った。石塊が現れた。それを取り除くと、石造りの館が現れ、中には2つの金の錠がかけられた金の箱があった。(p.368) その箱は掘り出されると、マームーンのもとに運ばれた。彼はそれを先の使者の手でルームの王に届けさせた。

このような宝はたくさんあったが、それを獲得した者にも死が訪れた。[財宝は]忘れられ、獲得した者たちに対する羨望だけが残った。

<別の財宝>

アフワーズの境域に山があり、その山頂には泉がある。そこには毎年1ディーナール貨が投げられる。その片面には1つの肖像が描かれ、もう片面には12の肖像と蛇の皮が描かれる。これについては次のような話がある。

12人の息子を持つ王がいた。彼が臨終を迎えたとき、すべての子を呼び寄せて言った。「もし誰かが貧しかったり、また貧しくなったりしたら、私は中に1匹の蛇が入った小箱を持っているのだが、その蛇に従いなさい。そうすれば金持ちになれるだろう。」

[王は息子の]1人に小箱を預けた。息子の1人が貧しくなり、箱を[預かっていた者から]受け取った。彼が箱を開けてみると、1匹の蛇が出てきて、ある穴に入っていった。彼はその穴を掘り起こし、財宝や莫大な富を手に入れた。その息子が世を去って以来、毎年蛇は彼の財宝から1ディーナールを持ち出し、くだんの泉に沈めている。その蛇は3000年もの間生きていられると言われている。だがこの蛇がいつ姿を現し、どこへ行くのかは誰も知らない。これは驚くべきことである。

<ホラズムにある財宝>

次のように言われている。ホラズムの境域には財宝の眠る山がある。[そこには]石の扉があり、その扉の近くには水が満ちており、そこへ行こうとする者はみな溺れてしまう。[ある日]グズの不信心者がやって来て、ラクダ1000頭分の木材を運び、その水に投げ込んだ。だが翌日にはすべて沈んでしまった。また別の男がやって来て、天秤のような形の皿をこしらえた。彼は自ら一方の皿に座り、もう一方の皿に石を載せ、[天秤の]鎖を伝って進み、ようやく[扉に]近づいた。そこで彼は皿から跳び移り、財宝の扉の前に着地した。だが、財宝の扉をどうすることもできず、皿に戻ることもできなかった。彼はその場で数日間叫び続け、ついに息絶えてしまった。

つまりは、多くの財宝が隠されたが、しまいには手つかずのまま残された、ということである。一方、[財宝の多くが]アジャムとの戦争で獲得されたとするならば、(p.369) サアド・ブン・[アブー・]ワッカース(Sa'd b. [Abū] Waqqās)⁸³⁾の軍[の話]を挙げれば十分であろう。それらの中には70ハルヴァールもある金製品や宝石の数々があり、それらはまとめて「ホスロウの春(bahār-i Kistrā)」と呼ばれていた。それらがマッカに運び込まれると、宝石類の光が聖域(ハラム)の天井

83) 預言者ムハンマドの主要な教友。クライシュ族ズフラ家の出身。ウマル・ブン・アル=ハッターブによってイラク征服軍の司令官に任命され、カーディスィーヤの戦いでサーサーン朝軍を破った。その後クーファ建設に従事し、同地の初代総督となった [EI?: Sa'd b. Abū Waqqās]。

[全体] に反射した。ウマル・ブン・アル=ハッターブはそれを見て泣き出し、次のように言った。「哀れなホスロウよ、彼はこのすべてを妻の後夫のために集めていたのか。彼(ホスロウ)が死んだら、妻が次の夫と食いつぶしてしまうために。あるいは私の軍が略奪するために集めていたのか。」そして、「これらの財産はいかなる屋根の下にも行かせることなく、私は分け与えてしまおう」と[ウマルは] 誓った。その財産はあまりにも多く、彼は一昼夜かけてすべてを検分し、分配した。信徒の長アリーの取り分はごくわずかであったが、その価値は9万マグリブ・ディーナールにもなった。

<中国にある財宝>

アフラスィヤブの時代に中国の地に山があった。その頂で、2本の銅の柱が発見された。それらの[柱の] 周囲には次のような一文が記されていた。「私はこの柱を建てた王であり、300歳まで生きた。私は多くの財宝をこの柱の下に集めたが、それらは私に何の益ももたらさなかった。私の死後[これらの財宝が] 誰の手に渡るのか、私は知らない。私の得たものとは、それらを数え、勘定したこと、ただそれだけだった。決して財宝に喜んではならない。なぜならそれは永遠ではないからである。またたとえ財宝が永遠であったとしても、命は永遠ではない。今日あっても明日にはないのだ。」

アフラスィヤブは命じてその柱を打ち倒させ、そこから象100頭が運べるだけの金を取り出した。それらはみなディーナール金貨であった。どのディーナール金貨にもジャムシードの肖像が描かれており、それぞれ石の分銅で10マン[の重さ]であった。

財宝についてはこの程度のことを述べておこう。埋められた財宝がいかなる結末に至ったのか、そなたが知ることができるように。